

沖縄国際大学日本語日本文学研究
第17巻第2号（通巻第31号）
（平成25年3月1日発行）

南琉球・多良間島方言のオノマトペの形式

下 地 賀代子

南琉球・多良間島方言のオノマトペの形式

Forms of Onomatopoeia in Tarama Dialect of South-Ryukyuan

下 地 賀代子

SHIMOJI Kayoko

1. はじめに

オノマトペは一般的に擬声語・擬態語とも呼ばれ、その「語彙の形態と意味の関係が恣意的ではなく、何らかの形で相関している」と考えられる一群の語彙である(田守・ローレンス1999:5)。琉球諸方言にも豊富なオノマトペ語彙がみとめられているが、その形式的な特徴の分析および意味の記述・考察は、その他の項目に比べるとあまりなされてきておらず、多良間島方言についてもそれは例外ではない。本研究では、同方言のオノマトペ研究の手始めとしてオノマトペ語彙の形式を分析し、さらに各形式の対応関係の考察を試みる。

用例について、すべて音韻表記を用いて示している¹。また、たずね文などにおける語尾の上昇は「ka[kí] (書く?)」のように示す。訳文について、助辞や文脈を示すためなど、用例中に現れていない要素は()に入れて示す。{ft.}は意訳、{note.}は注記である。なお本研究では、これまでの調査で得られた全方言資料の他、多良間村役場1981『多良間村の民話』の方言表記からも音価の認定が可能なものだけに限り用例として用いる。後者は例文末尾に[民]として示す。

2. 形式のタイプ

多良間島方言のオノマトペの音韻形式は、大きく、語基の繰り返しのないタイプ(「ひとえ形」²)と語基の繰り返されたタイプ(重複形)とに分けられる。以下、それぞれのタイプの下位分類を示していく。

2-1 ひとえ形

語基の繰り返しがなく、1音節で成るものから3音節で成るものまで、語基のタイプによって以下のように下位分類される。副詞となる場合は助辞-ti:の後接が義務的であり、(1)ではCV:qtiのように促音が現れる。重複形よりも用例数が少ない。

(1)CV:型

- 1 [pi:]qti: iziqtı: tubagari: tubıtaL-ti:.
ピーツと言って {ft. 鳴いて} 飛んでいったと。[民]
- 2 mizā-Nke:, upu-ikī-u [fu:]qti: fukakiqtı: nuMtika:-ja, nu:N-mai naraN.
水へ、大きく息をフーツと吹きかけて飲めば、どうにもならない {ft.問題ない}。
[民]
- 3 nu:ma-nu aikī sīkakītaka: qsubara-Nke: [da:]qti pu:ri:,
馬が歩き始めたら後ろにダーツと (種を) 放って、[民]

(2)CV:N 型

- 4 kunu ja:-Nkanu jadufucē:, [cja:N]-ti: akiqtı: [cja:N]-ti: qfiqtı:-nu jadu ari:,
この家の戸はチャーンと開いてチャーンと閉まる戸だから、[民]
- 5 do:N-ti:-du uti: kī:ba[ju].
(大きい石が地面に) ドーンと落ちてくるよね。

(3)CVM 型

- 6 hai sīgutu, [voM]-ti: tati.
はい仕事 (だ)、ウォンと立て。{note. 勢いよく動く様を表す}
- 7 kadifuki-N-du deNseN-nu [voM]-ti: nari:L.
台風で電線がウォンと鳴っている。
- 8 zjo:, [cjaM]sju:.
さあ、チャンしよう。{note. コップなどを少し合わせる音を表すことから、「乾杯
しよう」の意で用いられている}

(4)CVM:型

- 9 [goM]-ti: pari: ku:.
ゴンーと走って来い。{note. 勢いよく走る様を表す} [高橋1994 : 155]

(5)NCV:型

- 10 usē: [Nbo:] -ti:-du baNkī, piNda: [Nbe:] -ti:-du baNkī.
牛はンポーと鳴いて、山羊はンペーと鳴く。

(6)CVCV 型

- 11 pagama-mai [zjara] -ti: uti, ko:baku-mai [zjara] -ti: utitaL-ti: = jo.
(頭にくっついていた) ハガマもジャラと落ち、香箱もジャラと落ちたそうだよ。
[民]
- 12 Nne:ka-kara, [gasu] -ti: kī:taL-cī:-badu,
真ん中からガスと切ったら、[民]

13 [biku]-ti:-mai sjuN.

ビクともしない。[高橋1995 : 94]

(7)CVCV:型

14 du:-Nka-nu [cipu]-ti siba,

体の中がツィプー {ft. ホワー} とするので、[民]

15 upuami-nu-du [dada]-ti:-du qfi:L.

大雨がダダー {ft. ザーザー} と降っている。

(8)CV:CV 型

16 misimakaL-nu [zja:ra]-ti: bari:.

飯茶碗がジャーラ {ft. バリン} と割れた。

17 [bi:ka]

「めじろやすずめの鳴く擬声語。」[高橋1994 : 193]

(9)CVqCV 型

18 mainici juki-gama-sji:, [goqfa]-ti: ci:iki:-nu wazja:, mai-ja mi:N sigutu-du ari:
uki.

毎日小斧で、ゴッフア {ft. コツン} とつついての仕事は、前は見えない {ft. 先
の見えない} 仕事だった。[民]

19 [baqcja]-ti: sutugi.

バツチャ {ft. バチン} と叩く。

(10)CVNVCV 型

20 uibi-sji: cuga-ti: sji: ukibadu, unu tarama-nu pito: [cuNka]-ti: sibadu,

(目を) 指で突こうとしたら、その多良間の人はツンカ {ft. パチッ} と (まばた
き) したので、[民]

21 [doNma]-ti: urida:.

ドンマ {ft. ドン} と下りなさい。{note. ヒトが高いところから勢いよく下りる様
を表す}

(11)CVCVVCV 型

22 ki:-nu juda-nu [paraka]-ti: buri:.

木の枝がパラカ {ft. ポキッ} と折れた。

23 [zjabura]-ti:-du utiL.

(石が池に) ジャブラ {ft. チャボン/ポチャン} と落ちる。{note. 落ちるモノの
大小は関係ない}

24 Nme [guruku]-ti: to:riLba,

(家が) グルク {ft. コロツ} と倒れるので {ft. 倒れたので}、[民]

(12)CVqCVCV 型

- 25 agai, du:-ga akasjarabaL-nu, we: aqzja-gama-Nka-Nke: we:, [doqfara]-ti: we:,
uriqta.

ああ、自分の赤地原の、畦に、さあ、ドッフアラ {ft. ストン} と、降りた。[狂言]

(13)CVqCVCV:型

- 26 upumi:-ja akabuta-nu nakigata-u mati: buL-ke:, [goqgego:] -ti nakibadu,
ウプミーは暁の鶏が鳴くのを待っているうちに、ゴッグゴと鳴くので、[民]

なお、鶏の鳴き声を表すオノマトペは複数見られ、以下のような変則的な形式のものが現れている。

- 27 tuLra [gogegoqgo:] -ti:du baNki.

鶏はゴゲゴッゴと鳴く。

- 28 mi:duL-nu kuga-u nasi ba:-N-ja [kuke:koqko] -ti:du baNki = sja:mi:.

めんどりが卵を産むときはクケーコッコと鳴くよね。

2-2 重複形

語基が繰り返され、ひとえ形よりも用例数が多い。特に(2)の語基が CVCV となるタイプの数が多く、これが多良間島方言オノマトペの最も基本的な形式と考えられる。副詞となる場合の助辞 -ti: の後接は義務的ではないが、伴うほうが好まれるようである。

(1)CV:型

- 29 kadi-nu [ba:ba:] -ti fuki:L.

風がバーバー {ft. ビュービュー} と吹いている。

- 30 pigi-u [bo:bo:] -ti: Nbasji:

ひげをボーボーと伸ばして (いる)。

- 31 qfazjime: [bi:bi:] -ti: nakiqte:.

ヤモリはピーピーと鳴いて、[民]

- 32 [da:da:] -ti Ndasina.

(水を) ダーダーと出すな。

- 33 wa:-nu [gu:gu:] -ti: baNki:L.

ブタがゲーゲー {ft. ブーブー} と鳴いている。

34 ina-nu-du [bjo:bjo:] -ti: baNki:L.

犬がビョービョー {ft. ワンワン} と吠えている。³

(2)CVN 型

35 gata: ui-du beta: mi:-ti: umu:sjugadu, kare: araN, kaL-ga sita-N-du mi:
ari:-du, [cuNcuN] -ti: buL,

バッタは上 (のを)、私たちは目と思うけど、あれではない、あれの下が目だから、
(覆われず) ツンツン {ft. パチパチ} と (して) いる、[民]

36 kare: aparagi qfa-gama-u mi:zi: pukarasja:, Mne: [toNtoN] -ti:, mi:-gama-u
s̄itui,

彼は美しい娘を見る嬉しさ (で)、胸はトントンと、細目をして、[民]

(3)CV:N 型

37 duragani-nu uto: [ga:Nga:N] -ti: naL. ドラ鐘の音はガーンガーンと鳴る。

38 [pa:Npa:N] -ti:-du akariqti:-ja simaLsimaL buLba,

(戸が) パーンパーンと開いては閉まる閉まる (して) いるので {ft. 開いたり閉
まっているので}、[民]

(4)CVM 型

39 fugi-u u:-ba:N-ja [daMdaM] -ti:du naL. 釘を打つときはダンダンと鳴る。

40 [voMvoM] -ti: parijo:. ウォンウォンと走れよ。{note. 勢いよく動く様を表す}

41 [voMvoM] -ti:du kabituL-nu tubagari:L.

ウォンウォンと風が飛んでいる。{note. 風切り音を立てるための羽がついている}

(5)CVL 型

42 [daLdaL] -ti:nu mai = na:.

ダルダル {ft. ドロドロ} のご飯だな。{note. 水気の多い様を表す}

43 kuma-nu-du [sjaLsjaL] -ti:-du ma:ri:L.

コマがシャリシャリと回っている。

(6)NCV:型

44 akaqva-nu [Nga:Nga:] -ti:du naki:L.

赤ん坊がンガーンガーと泣いている。

(7)CVCV 型

45 pisi-nu-du [banabana] -ti:-du pikari:L-[ba]=ju.

星がバナバナ {ft. キラキラ} と光っていますよ。

46 hai, [basjabasja] -ti: a:gara-u acimi: me:sji.

ほら、バシャバシャ {ft. さっさ} と粟がらを集めて燃やせ。{note. 急いで動作をする様を表す}

- 47 maĩsĩzi-nu-du, busjubusju -ti: muiki: buL.
米粒が (虫のように) ブシュブシュ {ft. うようよ} と動いている。[民]
- 48 usukanu pĩtu-Nka-u-te:N mi:-ja ganagana -ti: mi:-te:N buL.
大勢の人の中 {ft. 人込み} をだけ目はガナガナ {ft. キョロキョロ} と見てばかりいる。[民]
- 49 izara-ni: fukē: gasugasu -ti: kisjiqti:-ja,
鎌で茎はガスガスと切っては、[民]
- 50 mamaqfa: pazĩme:, patapata -ti: fuqri:,
継子は初めは、パタパタ {ft. ガタガタ} と震えて、{note. 寒さで} [民]
- 51 utuqra:Lba pĩtupĩtu -ti: fuqri:L.
恐ろしくてブイトゥブイトゥ {ft. ガタガタ} と震えている。
- 52 ki:-nu pa:-nu-du sjakisjaki -ti: buL.
木の葉がシャキシヤキ {ft. ギザギザ} としている。{note. 葉の縁の様子。魚の歯、のこぎりの歯などには使えない}
- 53 miduM-ja nada-u sjarasjara -ti: utusi-ke:N,
女は涙をシャラシャラと落としながら、[民]
- 54 iM-nu sjuku-nu fuka-dukuru-nu, sjarasjara -ti: mi:raritaka: sugu-du arasi-nu sji: ki:.
海の底の深い所がシャラシャラと見えたら、すぐに嵐が来る。{note. モノゴトがはっきりしている様子を表す} [民]
- 55 zjarazjara -ti: tiN-kara kanigaki-nu uri: ki:,
ジャラジャラと天から金鉤が下りてきて、[民]
- 56 asji-nu dadadada -ti: paLru:.
汗がダダダダ {ft. ダラダラ} と流れるよ。

以上の他、このタイプのオノマトベとして barabara (グツグツ)、cipucĩpu (重労働などをして疲れた様)、cjoicjoi (コックリ)、cjagacjaga (パタパタ)、dapadapa (水滴の垂れる様)、daradara (ダラダラ)、gazjagazja (ガヤガヤ)、guruguru (グルグル)、guzĩguzĩ (ゴクゴク)、karakara (カラカラ)、kasjakasja (カサカサ)、kucjukucju (クチュクチュ)、purupuru (米が生煮えで固い様)、sjurisjuri (シャンシャン 健康な様) など多くの語が確認できている。

(8)CV:CV 型

57 [go:sjogo:sjo] sjauki.

ゴーショゴーショ {ft. ズリズリ} 引っ張る。

58 peqkibakaL-nu upudi:-nu sjura:[burabu:ra]-ti: buL,

(百斤ぐらいの大きい手の先はブルーブルーと (して) いる。{note. 大ダコの話。
upudi:はより大きい2本の足を指している} [民])

59 marubi:-ja paLpaL, jaqtusji:, ike:[ba:kaba:ka]sítui, ja: cuki: ukī=sja.

転んでは走り走り、やっとで、息はパーカパーカ {ft. フーフー} して、家 (へ)
着いたよ。[民]

(9)CVqCV 型

60 ti:nu [muqcjamuqcja]-ti:-du buL.

手がムッチャムッチャ {ft. ベタベタ} と (して) いる。

61 [kiqfakiqfa]-ti: pana-u pīsji:

キッフアキッフア {ft. クシュクシュン} と鼻をひり {ft. くしゃみをして}、
[民]

62 uma-u sugitaka: sjaNge:[baqtabaqta]-ti: sítui,

そこを過ぎると鳥肌はバツバツとして {ft. 鳥肌がプツプツと立って}、[民]

63 buto: tuzi-nu pu:gī-nu-du piNnasja:Lba, sjimitaka:-du, tuzi-mai [baqcjabaqcja]
-ti:, ato: auja:-u sji,

夫は妻の様子が変なので、責めると、妻もバッチャバッチャと (して) {ft. プツ
プツと文句を言って}、後はけんかをして、[民]

64 nibui-ja [guqcjaguqcja]ti: narasítui,

のどをグッチャグッチャ {ft. ゴクンゴクン} と鳴らして、[民]

(10)CV:qCV 型

65 uqpugi: udaki-nu, taikaku:, kure uni-be:M-ti: gurai-nu niNgiN-nu tauke:,

[jo:qtijo:qti]-ti: sítui nu:ri: kitaL-ti.

大きくて高い体格を (して)、これは鬼じゃなからうかと (いう) ぐらいの人間が
1人、のっそりのっそりと上ってきたそうだ。[民 t]

(11)CVCVN 型

66 suzo: [zjaraNzjaraN]-ti:-du naL.

鈴はジャランジャランと鳴る。⁴

(12)CVNVCV 型

67 mi:-ja [cuNmacuNma]-ti:.

目はツンマツンマ {ft. パチパチ} と (している)。[民]

(13)CVCVCV 型

- 68 juka:rakara mata, kasjarakasjara -ti: nuNdi: ki:ba,
そばからまた、カジャラカジャラ {ft. カサカサ} と (何かが) 出てくるので、
[民]

2-3 その他の形

2-3-1 語末長音化形

末尾音が長音化して現れている。次節で見るように、他の形のオノマトペ語彙の強調形式である。

- 69 jaL-ni:du gusu: -ti: zjaNki:taL.
やりでグスーと刺した。
70 pata-nu batabata: -ti sji: buL.
旗がバタバターとしている。

2-3-2 多重複形

3回重複されるタイプと4回重複されるタイプとがある。なお、用例75は語末音が長音化した語末長音化形でもある。

(1)V:型 (3重複)

- 71 jarabi-nu e:e:e: -ti:-du nakī.
子供がエーエーエーと泣く。

(2)CV:型 (3重複)

- 72 ga:ga:ga: -ti pana-u narasji: buL.
ガーガーガーと鼻を鳴らしている。{note. いびき}
73 nara-u ki:-nu cukī-taL-ga = ge:ra, voM-ti tatiqti:, be:be:be: -ti: baNkiqti:,
自分を {ft. に} 気がついたのか、ウォンと立って、ベーベーパーと鳴いて、{note.
不特定の動物の鳴き声を表す} [民]

(3)CVCV 型 (3重複)

- 74 pi:sjaN gatagatagata -ti:du fuqri:L.
寒くてガタガタガタと震えている。
75 unu gama: Mme, garagaragara: qti utu-ba sji:-du fuqzje:,

その洞窟は、もうガラガラガラと音をして崩れて、

76 akaci:-nu [dadadadadada] -ti: pari: buL.

血がダダダダダと流れている。

(4)N:型 (4重複)

77 juka:ra-N, udaka-nu qfu-munu-nu taqtui, [N:N:N:N] -ti: takiri:,

そばに大きな黒いものが立って、ンーンンンンとうなり、[民]

2-3-3 形容詞語幹 + CV 重複形

CV 型の重複形オノマトベに、形容詞語幹を前接させた形式である。

78 aumami-nu [au-birubiru] -ti:du buqra:.

青豆がアウビルビルと {ft. すずなりに} なっ8いるよ。

79 nici-nu Nditui-du miga-ga kamucë: [aka-ku:ku:] -ti: buL.

熱が出て、ミガの頬はアカクークーと (して) いる。{note. 赤く火照っている、ということ}

80 [aka-ku:ku:] -ti:nu umasja-gi riNgo = na:.

アカクークーの {ft.赤々として} おいしそうなりんご (だ) な。

81 pīnuMmi: butaka: du:-nu [aci-ku:ku:] -ti sji: kī:.

火に当たっていたら体がアツクークーとしてきた {ft. ぽかぽかしてきた}。

2-3-4 ga 強調形

主に重複形オノマトベの語基と語基の間に ga が入り込んだ形式である。高橋1994では「意味を強める」ものとされている (p140)。

82 garasja: [ga:gaga:] -ti: baNki = sa:.

カラスはガーガーと鳴くでしょ。

83 cibi-mai agi, pi:-ja [bu:gabu:] -ti: pī:-ke:N piNgiLbadu,

お尻も上げ、尻はブーガブーとひりながら逃げるので、[民]

84 mazumunu-nu Nme: [ha:gaha:] -ti: bare:qti:.

化物たちはハーガハーと笑って、[民]

85 qfa-garasja-nu tabaLtui upuganu cīnu:, [paqtagapaqta] -ti: cucuki: buL-ke:.

小鳥が集まって大きな角をパッタガパッタ {ft. ガツンガツン} とつついているうちに、[民]

- 86 pĭtu-nu ja:-Nka-Nke: kumara: iki:, osjiire-nuja:, taNsu-nuja:-ti parakagaparaka
-ti: kaMhuri: mi:Lbadu,
人の家に入って行って、押し入れとかタンスとかと、パラカガパラカ {ft. ガリガリ} とかじってみると、[民]
- 87 iqvĭ-ni:-ju cuMtaL basja-u sjo:kĭ nu:ma-nu-du, ba:kagaba:ka-ti: iki-u fuki:taL.
重い荷物を積んだ場所を引く馬が、パーカガパーカ {ft. ゼーゼー} と息を吐いていた。

2-4 多良間島方言のオノマトペの形式

ここまでを示してきた多良間島方言のオノマトペの音韻形式を表にまとめて示す。

ひとえ形		重複型	
(1)CV:型	pi:, fu:, da:	(1)CV:型	ba:ba:, bi:bi:, da:da:
		(2)CVN 型	cuNcuN, toNtoN
(2)CV:N 型	cja:N, do:N	(3)CV:N 型	ga:Nga:N, pa:Npa:N
(3)CVM 型	voM, cjaM	(4)CVM 型	daMdaM, voMvoM
		(5)CVL 型	daLdaL, sjaLsjaL
(4)CVM:型	goM:		
(5)NCV:型	Nbo:, Nbe:	(6)NCV:型	Nga:Nga:
(6)CVCV 型	zjara, gasu, biku	(7)CVCV 型	banabana, gasugasu
(7)CVCV:型	cĭpu:, dada:		
(8)CV:CV 型	zja:ra, bi:ka	(8)CV:CV 型	go:sjogo:sjo, ba:kaba:ka
(9)CVqCV 型	goqfa, baqcja	(9)CVqCV 型	muqcjamuqcja, baqcjabaqcja
		(10)CV:qCV 型	jo:qtijo:qti
		(11)CVCVN 型	zjaraNzjaraN
(10)CVNVCV 型	cuNka, doNma	(12)CVNVCV 型	cuNmacuNma
(11)CVCVCV 型	paraka, zjabura	(13)CVCVCV 型	kasjarakasjara
(12)CVqCVCV 型	doqfara		
(13)CVqCVCV:型	goqgego:		
その他の形式			
語末長音化形		gusu:, batabata:, (garagaragara:)	
多重複形		(1)V:型 (3 重複)	
	(2)CV:型 (3 重複)	e:e:e:	
	(3)CVCV 型 (3 重複)	ga:ga:ga:, be:be:be:	
	(4)N:型 (4 重複)	gatagatagata, garagaragara:, dadadadadada	
形容詞語幹 + CV 重複形		N:N:N:N:	
ga 強調形		au-birubiru, aka-ku:ku:, aci-ku:ku:	
		bu:gabu:, paqtagapaqta, parakagaparaka	

表1 多良間島方言のオノマトペの形式一覧

ひとえ形、重複形それぞれに13の型のタイプが見られた。表の空き間は今回確認できなかった形式であるが、その多くが重なっていることから、ひとえ形の CVN 型、重複形の CVM:型などが現れて表の埋まる可能性は高いだろう。また、新たな型の出現することも想定される。

その他の形式について、まず語末長音化形はひとえ形、重複形など他のオノマトベ形式の強調形式と捉えられる。ただし用例数が少なく、語幹末尾が非長音の型全てが取りうる形式なのか、今後確認が必要である。また、多重複形の(3)CVCV 型および ga 強調形について、これらは重複形オノマトベの強調形式であり、それぞれの形式と意味との間に関連がみとめられる。この点については後述する。(1)V:型と(2)CV:型についても、ひとえ形オノマトベの強調形式であることが考えられる。特に後者については、これまでに現れている用例が人のいびきや笑い声 (ha:ha:ha:)、動物の鳴き声のみであることから、「擬声語」に限られた形式である可能性が高い。なお、前者には同一の語基タイプのひとえ形は現れていない。

また、形容詞語幹 + CV 型重複形について、首里方言など沖縄方言にも同様の形式の語がみられる⁵。一方、沖縄方言に見られる「cimuwasawasa」(肝 + がやがや)や「miiguruguru」(目 + きよろきよろ)⁶といった名詞が前接した形式、名護市幸喜方言の「gi:guiha:gui (ぶつくさ)」、「nuruNturuN (ポーッと)」といった「はだかの部分重複形」(かりまた2012: 13)の形式は多良間島方言にはみられない。

3. 各形式の対応関係

3-1 ひとえ形と重複形の対応関係

前節に示した音韻形態から、多良間島方言のオノマトベにもひとえ形と重複形の、形式的な対応関係のみとめられるものがあることが分かる。日本語オノマトベの場合、語基の反復は「音や動作の繰り返さないしは連続を表す」(田守・ローレンス1999: 30)とされているが、多良間島方言のオノマトベにも同様のことが言える。

例えば、以下の例88の da: (ダー)と例89の da:da: (ダーダー)はいずれも (その)動きに勢いのある様を表す状態副詞として機能しているが、前者の動き「放る」が一挙に行われるものであるのに対して、後者の動き「(水を)出す」は継続的である。

88 nu:manu aikī sikakitaka: qsubara-Nke: [da:] qti pu:ri:,

馬が歩き始めたら後ろにダーッと (種を) 放って、[民] (= 3)

89 [da:da:] -ti Ndasina.

(水を) ダーダーと出すな。 (= 32)

次の例90の gasu (ガス) と例91の gasugasu (ガスガス) にも同様のことが言える。いずれも 包丁などでモノを切る様 を表す様態副詞であるが、前者の「切る」動作が単一的であるのに対して、後者の「切る」動作は反復的である。

- 90 Nne:ka-kara, [gasu]-ti: ki:taL-ci:-badu,
真ん中からガスと切ったら、[民] (=12)
- 91 izara-ni: fukë: [gasugasu]-ti: ki:sjiqti:-ja,
鎌で茎はガスガスと切っては、[民] (=49)

また、形式的には対応しているが、意味が全く異なるひとえ形と重複形のペアもみられた。いずれも様態副詞であるがそれらが修飾する動詞の指し示す動作は同じではなく、例92の baqcja (パチン) は 手などでモノやヒトを叩く様 を、例93の baqcjabaqcja (ブツツ) は 小言や文句を言う様 を表している⁷。なお、単一的か継続的かの対立はある。

- 92 [baqcja]-ti: sutugî.
パッチャ {ft.パチン} と叩く。(=19)
- 93 buto: tuzî-nu pu:gî-nu-du piNnasja:Lba, sjimitaka:-du, tuzî-mai [baqcjabaqcja]-ti:, ato: auja:-u sji:,
夫は妻の様子が変なので、責めると、妻もパッチャパッチャと (して) {ft.ブツツと文句を言って}、後はけんかをして、[民] (=63)

3-2 ひとえ形、重複形と語末長音化形の対応関係

日本語オノマトベと同じく、多良間島方言のオノマトベにも末尾音の長音化の有無による対応がみとめられる。以下の例94の gusu (グサ) と95の gusu: (グサー) はいずれも刃物などでモノを刺す様 を表す様態副詞であるが、その「刺し方」に違いがある。

- 94 jaL-ni: [gusu]-ti: pitukî zjaNkitaL.
やりでグサと1回刺した。
- 95 jaL-ni:du te:pudai [gusu:]-ti: zjaNkitaL.
やりで力いっぱいグサーと刺した。(69)

すなわち、gusu: の方がより勢いよく、深く「刺す」ことを表している。なお、これ

らの語には語基を同じくする重複形 *gusugusu* (グサグサ)、その語末長音化形 *gusugusu:* も対応している。以下の用例96では「刺す」動きが反復されていることを、用例97では1度目の「刺す」程度が浅かったため、そこから さらにカ一杯刺し込む様子が表されている。

96 jaL-ni: gusugusu -ti: ifuke:rimai zjaNkitaL.

やりでグスグスと何回も刺した。

97 jaL-ni: gusugusu: -ti:du uki-Nka-gami zjaNkitaL.

やりでグスグスーと奥にまで刺した。

だが、すべての重複形とその語末長音化形のペアがこのような意味的対立を持つわけではないようである。例えば先に挙げた用例91の 包丁などでモノを切る様を表す *gasugasu* について、話者によるとこれを *gasugasu:* 置き換えても意味的な差異はほとんど感じないという。また、汗など 液体状のモノが流れる様を表す *daradara* (ダラダラ) の語末長音化形 *daradara:* は、以下に示すように、その「流れる」主体が何であるかによって実現される具体的な意味内容が少々異なっている。

98 usi-nu judaL-nu daradara: -ti: pari: buL.

牛のよだれがダラダラーと流れている。{note. よだれが伸びて長く垂れている様を表す}

99 asji-nu daradara: -ti: pari: tumaraN.

汗がダラダラーと流れて止まらない。{note. 汗が継続的に流れ出ている様を表す}

以上のことから、語基を同じくするひとえ形と重複形は主にその動きの反復・継続性において、そして語末長音化形とはその動きの勢いの強さの度合いにおいて、意味的に対立していることがわかる⁸。そして、重複形オノマトペの語末長音化形では反復される動きの1つ1つの勢いが強くなるわけではなく、そのオノマトペの表す語彙の意味によって、「強調」される部分が異なる、あるいは意味的な「強調」自体が生じないということが窺えた。

3-3 語幹を部分的に同じくする形式の対応関係

語基末尾の音節が異なるなど、完全な対応関係にはないオノマトペ語彙のペア、あるいはグループがみられる。以下、形式ごとに見ていく。

3-3-1 CVCV 型ペアと CVCVN 型重複形の対応関係

CVCV 型のひとえ形と重複形のペアに、さらに語基末尾に撥音を伴った CVCVN 型重複形が対応している。田守・ローレンス1999は「語末に撥音を持つこの種のオノマトベは、大半が擬音語で、(中略) 撥音が「共鳴」を表す」と述べており (p28)、その他の音を表すオノマトベ語彙についても確認、検証する必要がある。なお、用例16の zja:ra (バリン) もこのグループに含まれるだろうか。

- 100 pagama-mai [zjara] -ti: uti, ko:baku-mai [zjara] ti: utitaL-ti: =jo.
(頭にくっついていた) ハガマもジャラと落ち、香箱もジャラと落ちたそうだよ。
[民] (= 11)
- 101 [zjarazjara] -ti: tiN-kara kanigaki-nu uri: ki:,
ジャラジャラと天から金鉤が下りてきて、[民] (= 55)
- 102 suzo: [zjaraNzjaraN] -ti:-du naL.
鈴はジャランジャランと鳴る。(= 66)

3-3-2 語基末尾に -ka / -ma / -ra を伴う形式との対応関係

ひとえ形では CV:N 型、重複形では CV: 型、CVN 型、CVCV 型に、語基末尾に -ka、-ma、-ra を伴う形式と対応するオノマトベ語彙がみとめられた⁹。このとき、語幹末尾にプラス のついた語の「形」(ひとえ形か重複形か) は、プラス のない語の形がいずれであるかには関わらないようである。なお、用例103と104のペアのように共通する語基部分が多少異なるもの、用例107~109のように2種の形式が対応するものもみられた。

- 103 [do:N] -ti:-du uti: ki:ba[ju].
(大きい石が地面に) ドーンと落ちてくるよね。(= 5)
- 104 [doNma] -ti: urida:.
ドンマ {ft. ドン} と下りなさい。{note. ヒトが高いところから勢いよく下りる様を表す} (= 21)
- 105 kadi-nu [ba:ba:] -ti fuki:L.
風がバーバー {ft. ビュービュー} と吹いている。(= 29)
- 106 marubi:-ja paLpaL, jaqtusji:, ike: [ba:kaba:ka] situi, ja: cuki: ukī=sja.
転んでは走り走り、やっつとで、息はバーカバーカ {ft. フーフー} して、家(へ)着いたよ。[民] (= 59)
- 107 gata: ui-du beta: mi-ti: umu:sjugadu, kare: araN, kaL-ga sita-N-du mi: ari:-du,

- cuNcuN -ti: buL,
 バツは上 (のを)、私たちは目と思うけど、あれではない、あれの下が目だから、
 (覆われず) ツンツン {ft. パチパチ} と (して) いる、[民] (= 35)
- 108 uibi-sji: cuga-ti: sji: ukibadu, unu tarama-nu pito: cuNka -ti: sibadu,
 (目で) 指で突こうとしたら、その多良間の人はツンカ {ft. パチッ} と (まばた
 き) したので、[民] (= 20)
- 109 mi:-ja cuNmacuNma -ti:
 目はツンマツンマ {ft.パチパチ} と、[民] (= 67)
- 110 simi:rabamai uNkisita: parapara kaM = dara:na.:
 しけていてもこの子 (のような若者) らはバラバラ {ft. パリパリ} 食べるよ。
- 111 ki:-nu juda-nu paraka -ti: buri.:
 木の枝がバラカ {ft. ポキッ} と折れた。(= 22)
- 112 amaN-ja nara-ga situfu ku:-ju sjo:kitui aLkitari:-du, ki:-nu pa:-nu kasjakasja
 -ti: sji: uki-gi munu.
 ヤドカリは {ft.が} 自分の重たい殻を引きずって歩いたので、木の葉がカシャカ
 シャとしたらしい。[民]
- 113 juka:rakara mata, kasjarakasjara -ti: nuNdi: ki:ba,
 そばからまた、カシャラカシャラ {ft. カサカサ} と (何かが) 出てくるので、
 [民] (= 68)

また意味的な面について、いずれのペアあるいはグループにも共通性がみとめられる。
 例えば、用例110の parapara (パリパリ) は モノの固い様 を表し¹⁰、111の paraka
 (ポキッ) は 固いモノが折れる音 を表すというように、両者の語彙の意味には モノ
 の固いこと という共通点が窺える。これらの対応関係については、語基末尾に伴われる
 -ka / -ma / -ra がどのような「意味」を元の語に付加しているかについても、さらに用例
 を集めて考察していく必要があるだろう。今後の課題としたい。また、1組だが -ku が
 伴われている語とのペアもみられた。¹¹

- 114 ki:-nu-du guruguru -ti: ma:ri: uti: ki:
 木がグルグル {note. ゴロゴロ} と回って落ちてきた¹²。
- 115 Nme guruku -ti: to:riLba,
 (家が) グルク {note. コロッ} と倒れるので {ft. 倒れたので}、[民] (= 24)

4. ga 強調形について

語基と語基の間に-ga が入り込んだ形式であり、いずれの用例でも反復・継続性がみとめられることから、重複形をベースに作られる形式であると考え。ほとんどの重複形オノマトベがこの形をとれるようだが、その派生のしやすさ、また元の形式との意味的な差異についてはまだ曖昧な点も多い。本節では、これまでに得られた用例から明らかにし得たことを示していく。

まず動作の様態を表す重複形オノマトベで、その動きの勢いの程度の大小にかかわる重複形オノマトベには ga 強調形が多く現れている。

116 [ga:raga:ra] / [ga:ragaga:ra] -ti:du wazja-uba sī.

てきばきと仕事はする (ものだ)。

117 hai, [basjabasja] / [basjagabasja] -ti: a:gara-u acimi: me:sji.

ほら、さっさと粟がらを集めて燃やせ。{note. 動作がはい様} (= 46)

118 idifunigusū-ti: pītu-nu awati: buLbaM [bu:sjubu:sju] / [bu:sjugabu:sju] -ti: aLki: buL.

出船急ぎ {note. 出船に間に合うよう急ぐこと} と人が慌てていても、のんびりと歩いている。

119 jarabi-nu Mme-nu [gaqtagaqta] / [gaqtagagaqta] -ti: sjamo:gi:L.

子供たちがどたばたと騒いでいる。

これらの他、用例48の ganagana (キヨロキヨロ、あちこち周囲を見回す様)、63の baqcjabaqcja (ブツブツ、文句を言う様) についても、それぞれの ga 強調形 (ganagagana、baqcjagabaqcja) を確認している。

また、主体となるものの動作、状態に付随的に生じる「音」に由来すると思われる重複形アスペクトにも、ga 強調形を派生させているものが多くみられた。用例120のもとの形式 paqtapaqta は 木の枝などで叩く様を、121の元の形式 parakaparaka は 固いものをかじる様を表すオノマトベ語彙である。

120 qfa-garasja-nu tabaLtui upuganu cinu:, [paqtapapaqta] -ti: cucuki: buL-ke;

小鳥が集まって大きな角をパッタガパッタ {ft. ガツンガツン} とつついているうちに、[民] (= 85)

121 pītu-nu ja:-Nka-Nke: kumara: iki:, osjiire-nuja:, taNsu-nuja:-ti [parakagaparaka] -ti: kaMhuri: mi:Lbadu,

人の家に入って行って、押し入れとかタンスとかと、パラカガパラカ {ft.ガリガリ} とかじってみると、[民] (=86)

122 ga:sjaga:sja / ga:sjagaga:sja -ti: du:-ju kaki:L.

ガーシャ (ガ) ガーシャ {note. ポリポリ} と身体を搔く。

123 suqzjaziru: ni:L-badu buqtubuqtu / buqtugabuqtu -ti: a:buku-nu NdiL.

さとうきび汁を煮るとブットウ (ガ) ブットウ {note. ブクブク} と泡が出る。

さらに以下の用例から、動物の鳴き声、ヒトの笑い声や生理現象に伴う音を表す重複形オノマトベも ga 強調形をとりやすいことがわかる。

124 garasja: ga:gaga: -ti: baNki = sa:.

カラスはガーガガーと鳴くでしょ。(=82)

125 cibi-mai agi, pi:-ja bu:gabu: -ti: pi:-ke:N piNgiLbadu,

お尻も上げ、屁はブーガブーとひりながら逃げるので、[民] (=83)

126 mazumunu-nu Nme: ha:gaha: -ti: bare:qti:.

化物たちはハーガハーと笑って、[民] (=84)

また、感嘆詞にも同様の形式をとるものがあり、このことから語基の繰り返しに-ga が入り込むという形はオノマトベに特有のものではないことがわかる¹³。なお、以下の用例中にも見られるような、ma:ku(:)ma:ku(:)(丸く)、nufu:nufu (温かく) など形容詞語根が重複した形、ma:Lma:L (廻る廻る)、baru:baru: (笑う笑う) など動詞終止形が重複した形も、この-ga を伴う形式をとり得るといふ。ただし、実際に使用されることは極めて稀である。

127 M:na mi:-ja ma:ku:ma:ku: sji:, agaigaagai -ti: sjamo:gi: uduruki:.

皆目は丸くして、アガイガアガイと騒いで驚いて、[民]

128 Ndakuda-N kusukegakusuke -ti: baNki-ja ma:Lma:L buL-ke:, panapi:-mai nauri:.

あちこちクスケガクスケと叫んでは廻り廻りいるうちに、くしゃみも治って、[民]

意味の面については、ga 強調形を用いるとその動きの勢いの程度の大小が際立つようである。この程度の強さの「強調」は、語末長音化形と同様の動きである。例えば、以下の2つは語基を同じくする重複形と ga 強調形の用例だが、話者によると、どちらも 息

を激しくする様を表すが、後者の方はさらに「鼻を膨らませ息もたえだえ」であるなどの印象を受けるという。すなわち、ga 強調形の方がより勢いの程度が大きい状態を表すものと捉えられていることがわかる。

129 marubi:-ja paLpaL, jaqtusji:, ike: ba:kaba:ka situi, ja: cuki: uki=sja.

転んでは走り走り、やっつとで、息はパーカパーカ {ft. フーフー} して、家 (へ) 着いたよ。[民] (=59)

130 iqvi-ni:-ju cuMtaL basja-u sjo:ki nu:ma-nu-du, ba:kagaba:ka -ti: iki-u fuki:taL.

重い荷物を積んだ場所を引く馬が、パーカガパーカ {ft. ゼーゼー} と息を吐いていた。(=87)

しかし、オノマトペの例ではないが、単にリズムを整えるために -ga を伴っていると思われる用例も確認された。以下の用例は「ソーメン」を買ってくるよう頼まれた男が「メン」の部分だけを思い出し、「面」を買いに行く場面であるが、「メン」という語が「強調」されているとは捉えられない。語 (基) を繰り返し、間に -ga を入り込ませるといった共通の形式であることから、ga 強調形オノマトペについても、程度の強調よりも話のリズムを整えることを主な目的に用いられるという場合は十分に考えられる。

131 Nme meN-ga-meN -ti sutui meNja:-gami iki:, wazjawazja uni-nu miN-ju ke: muqtui kitaL-ti:.

もうメン (ガ) メンとして {ft. メンメンと言いながら} 面屋まで行き、わざわざ鬼の面を買って持ってきたそうだ。[民]

5. まとめにかえて

以上、多良間島方言のオノマトペ語彙の形式を分析・整理し、それぞれの形式の対応関係について考察を試みてきた。オノマトペは、音象徴やアクセントなどを含む音韻面を始め、その文法的機能、そして語彙的意味の記述など、さまざまな側面からの研究が求められる「ジャンル」であると考えられる。そして、そのさまざまな側面には強い相関関係がみとめられる。本研究を足掛かりに、音韻形態の特徴や文法的機能、語彙的意味の分析などの研究を発展的に進めていきたい。今回は触れられなかったが、例えば zjara (ジャラ) と zja:ra (パリン) のような CVCV 型と CV:CV 型の対立など、長音の有無による意味的な違いの考察も必要である。また、dadamikasi ((おしっこを) もらす)、tutumiki (ときめく)、zjaramikasi ((お皿などを) 割る) など、オノマトペから派生したと考えられる

動詞も見られることから、このようなアスペクトに関わる派生語などの記述考察も併せて行う必要があると考える。

参考文献

- 寛壽雄、田守育啓編1993 『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』 勁草書房
- かりまたしげひさ2012 「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」 『日本東洋文化論集』 18 : 9-28, 琉球大学法文学部
- 高橋俊三1993 「多良間方言の語彙 (中間報告)」 『多良間島調査報告書 (1) - 地域研究シリーズ No.19』 沖縄国際大学南島文化研究所 : 73-164
- 高橋俊三1994 「多良間方言の語彙 (中間報告 2)」 『多良間島調査報告書 (2) - 地域研究シリーズ 20』 沖縄国際大学南島文化研究所 : 123-223
- 高橋俊三1995 「多良間方言の語彙 (中間報告 3)」 『多良間島調査報告書 (3) - 地域研究シリーズ 21』 沖縄国際大学南島文化研究所 : 55-110
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ1999 『オノマトベ - 形態と意味 - 』 くろしお出版
- 那須昭夫2001 「重複形オノマトベの韻律構造」 『大阪外国語大学論集』 25 : 115-125

付記

本稿は、「HIOS 第4回若手研究者セミナー「琉球諸語の記述について考える」(2012.12.16於琉球大学、国際沖縄研究所主催・琉球諸語研究会共催)における口頭発表を基としている。また、文部科学省科学研究費(基礎研究(A)、課題番号 24242014)「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」(代表者 狩俣繁久)の研究成果の一部である。調査にご協力いただいた方々および発表の席上貴重なご助言を下された方々へ、この場を借りて篤く御礼申し上げたい。

¹ 本発表で用いている音韻表記の一部について、sjは [c]、cjは [ɰ]、zjは [ʁ, z]、hは [h, ç]、fは [ɸ] である。また N、M、Lは成節的な子音であり、その音価はそれぞれ [m, n, ɲ, ʝ, N, ...]、[m]、[l] である。また促音は q で表している。なお、両唇音の前に現れる [m] について、[mu, mi > m] の変化が想定される場合、また合成語などで後続する両唇音からの逆行同化ではないことが明確な場合 (ex. [im] (海) + [patarakī] (働く) > [imbatarakī] (漁など海で行なう仕事の総称)) を除き、/N/ の条件異音として扱っている。

² かりまた2012より。

³ 高橋1994の「bjo:bjo: ビョービョー [副] 犬が鳴く擬声語。」(p196)という記載を元に、作例してもらった。なお、多良間島方言の犬の鳴き声を表す擬声語には「wouwou」も見られ、この「wouwou」が人に吠え立てる場合など一般的な犬の鳴き声を表すのに対し、「bjo:bjo:」はいわゆる遠吠えを表す。

⁴ zjarazjara でも可。

- ⁵ 例えば aci-ku:ku:に対応する「アチコーコー?aqikookoo」などがある (cf. ?aqikookoosjooini kamee . ほやほやのうち食べる。(国立国語研究所編1963 『沖縄語辞典』 p102))。但し、aka-ku:ku:など色を表す形容詞語幹が前接している語は確認できていない。
- ⁶ 国立国語研究所編1963 『沖縄語辞典』より。前者は「胸さわぎするさま。心が浮き浮きするさま。」(p156)、後者は「㊦ (物を捜す時などに) 目をきよるきよるさせるさま。㊧ ばっちり。小児などの目のさま。」(p372より、用例省略)をそれぞれ表す。
- ⁷ 補足をしておくと、ひとえ形の baqcja には 小言や文句を言う様 を表す用法はない。また、重複形の baqcjabaqcja も 手などでモノやヒトを叩く様 を表すにはほとんど用いられず、この場合は guqtaguqta-ti: sutugi. (パチパチと叩く。cf. guqta-ti: sutugi. パチと叩く) のように言うのが普通であるという。
- ⁸ 同じく南琉球に属する宮古城辺の保良方言でも同様のことが言えるという。例えば 刃物などでモノを刺す様 を表すオノマトペについて、「ザウ」は軽く1回、「ザウザウ」は軽く2回、「ザウー」は深く1回というように、それぞれ「刺し方」が異なる (狩俣繁久氏 (琉球大学) 私信)。
- ⁹ 対応する (元の) 語は確認できていないが、用例23の zjabura (チャボン) もこのタイプになるだろう。
- ¹⁰ ここでは固いものを噛み砕いて食べるさまが表されている。
- ¹¹ 一種の母音調和によって生じた -ka の異形態か。ただし cuNka、cuNma の例がすでに現れており、可能性は低いようにも思われる。
- ¹² なお、「回る」主体の太さ・大きさに制限はなく、「木」を「鉛筆」に置き換えても文として成立する。
- ¹³ 用例127、128に示した感嘆詞の -ga を伴わない形式の用例を参考に挙げておく。(いずれも 『民話』より) cf 1. agaiagai, ara Mme, kure: zjuN-nu nuciNdi ariba, ああ、ではもうこれは本当の命拾いだから、2. pana-u pišiqti: sugu: kusuke:-ti: baNkitika:, くしゃみをしてすぐスケーと叫んだら、

言語地図から見る宮古諸方言の親族語彙

「父」「母」「子」「祖父」「祖母」「兄」「姉」

Miyako Dialect Kinship Words Viewed in a Linguistic Atlas:

'Father', 'Mother', 'Child', 'Grandfather', 'Grandmother',

'Elder brother' and 'Elder sister'

西岡 敏
NISHIOKA Satoshi

1. はじめに

沖縄言語研究センターによる宮古諸島全集落調査（以下、全集落調査）のデータを使用し、ファイルメーカーによって言語地図化する。今回扱う語彙は、親族語彙の一部である。

2. 父（図1）

土族語の「ウヤ系」と平民語の「イヤ系」「アイヤ系」「アサ系」に分類できる。言語地図では、「ウヤ系」と「イヤ系」の2語形併記の地点も多い。中本正智（1983：140）では、琉球列島全体の「父」の語彙が扱われているが、「イヤ系」は「ウヤ系」と一緒にされている。宮古方言では、「ウヤ系」と「イヤ系」が、土族語と平民語という意識で分かれていると全集落調査の調査メモにも記されているので、これらを同系にするかは慎重な立場をとったほうがよい。「ウヤ系」は「おや【親】」に由来すると考えられよう。「イヤ系」の語源は不明であるが、漢語「爺（や）」などと比較されうるのかもしれない。その「イヤ系」は、中本も指摘するとおり（中本1983：140）、八重山方言の竹富島・黒島などの地域でも用いられている（竹富島「イージャ」、黒島「イザ」）。

久貝・松原の語形である「アイヤ系」は、「イヤ系」に一人称を意味する「ア【吾】」が前に付いたものかもしれない。八重山・石垣方言の平民語に「アヤ」があるが（宮城信勇2003：56）、これと同系であろう。

「アサ系」は、中本正智（1983：144）に、「祖父」の意味するものとして与那国方言にあるとしている。

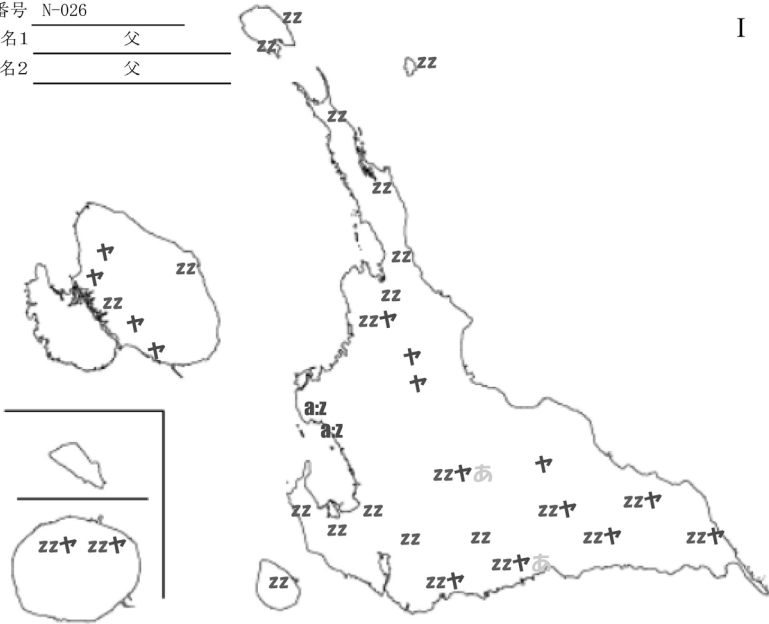
アサ系は与那国方言だけに用いられている。「おもしろうし」には、「父」をあらわす語として、「あさ」「あさい」がある。（中本正智1983：145）

項目番号 N-026

項目名1 父

項目名2 父

I



ウヤ系(土族語) ヤ uja oja

イヤ系(平民語) ZZ iza zza ia(大神島、摩擦弱?)

アイヤ系 a:Z a:iza a:ɕa

アサ系 あ asa

図 1

宮古語では、「父」を表す語として、「アサ」が上野野原、城辺友利で用いられている（「ウヤ系」「イヤ系」に加えて併記されている）。

土族語の「ウヤ」は、平良では「父」であるが、池間では「祖父」にあたる語になっている。かつては身分差（土族・平民）を示していた語彙が、地域差となって現れているところが注目される。全体的に見て、身分的に下位の語彙であった平民語の「イヤ系」が使われなくなり、上位の語彙であった土族語の「ウヤ系」に取って替わられつつある状況にあると言えよう。こうした状況は、以下で見ていく親族語彙にも、一般的に言えそうである。

3. 母 (図2)

土族語の「アンナ系」と平民語の「ンマ系」に大きく分類できる。他に「アニ系」の語がある。父と同じく「アンナ系」と「ンマ系」の2語形併記の地点もいくつかある。

中本正智 (1983 : 146-147) では、「ンマ」を「アム系」、「アンナ」を「アンナ系」に分類している。そして、「アム系」を上代語の「おも」「あも」と同源で、朝鮮語のömi (母) に関わる語とし (中本1983 : 147)、「アンナ系」を「あね【姉】」に関わる語としている。

アンナ系は宮古に分布する優勢形であり、八重山小浜島 (筆者注 : アンニ) にも存する。これは「あね」と関係のある語と思われる。「あね」は「姉」の意で「おもしろさうし」にも見られる。(中本正智1983 : 148)

中本は、小浜島の「アンニ」を「アンナ」の由来の有力な手がかりにしているものと思われる。全集落調査では、「母」を意味する語として、久貝に「アーニ」(第1音節は半長)、松原に「アニ」があり、狩俣に「ウパーニ」(<ウプアニ【大姉】)がある。「アニ系」も、小浜島の「アンニ」と同根と考えられ、「姉」と大いに関係がありそうな語である。

4. 子 (図3)

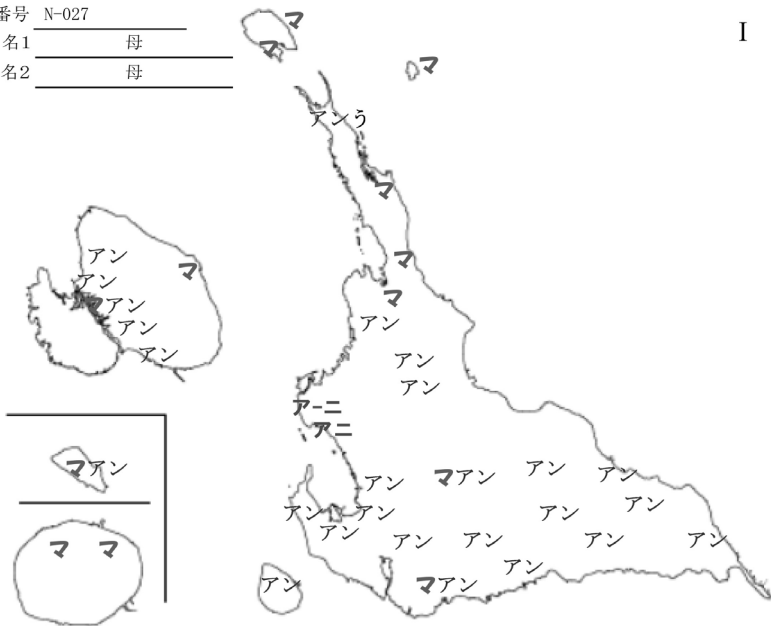
語源的には「こら」【子等】に関係がある語とされている。ほとんどの地域において唇歯摩擦音の重子音 [ff] で現れる一方、北部地域の大神・島尻・大浦では単子音 [f] で現れている (母音は代償延長されている)。さらに、最北端の狩俣では、単子音で現れるのみならず、唇歯摩擦音 [f] ではなく、両唇摩擦音 [ɸ] で記述されている。[ff] [f] [ɸ] と変化していく状況が見て取れる。

項目番号 N-027

項目名1 母

項目名2 母

I



アンナ系(土族語)	アン	anna	anna:
ンマ系(平民語)	マ	mma	mma:
アニ形 (ウブアニを含む)	アニ	ani	
	ア-ニ	a'ni	
	う	upa:ni	~ upuani

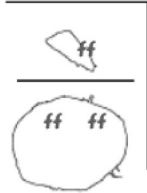
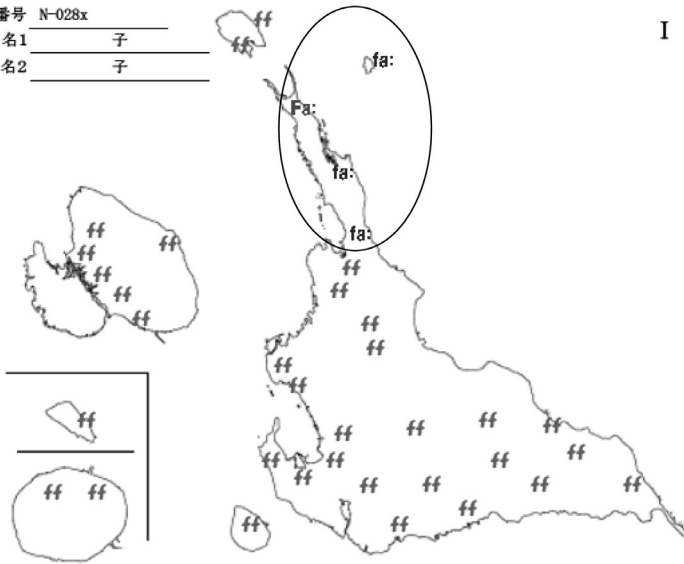
図 2

項目番号 N-028x

項目名1 子

項目名2 子

I



唇齒音・重子音・短母音	ffa	ffa
唇齒音・単子音・長母音	fa:	fa:
両唇音・単子音・長母音	Fa:	fa:

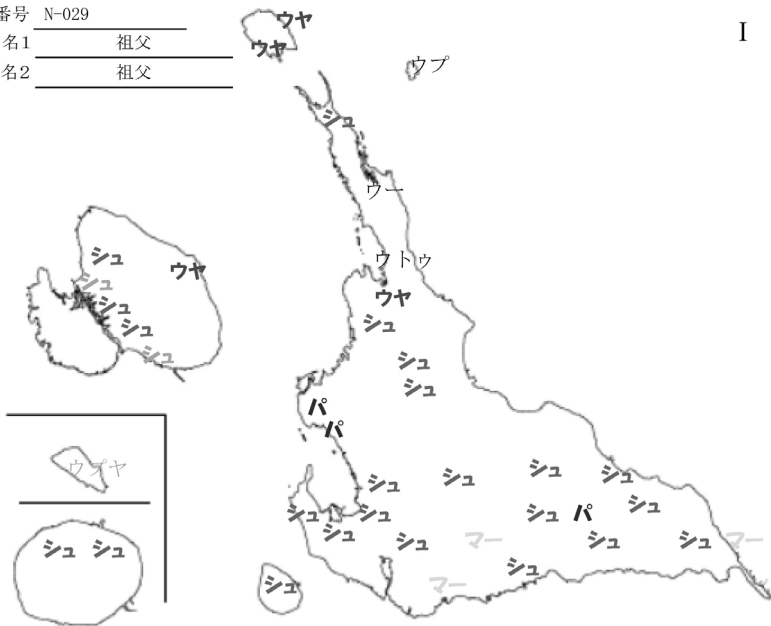
図 3

項目番号 N-029

項目名1 祖父

項目名2 祖父

I



シュー系(土族語)	シュ シュ	fu: fɔ:
ウヤ系(池間系)	ウヤ	uja
ウブイヤ系(島尻・大浦・大神)	ウー ウトウ ウブ	u:zza utuzza ɔpɔia
ウブアイヤ系(久松・砂川)	パ	upa:dza upu:adz̥a pa:dza
ウブウヤ系(水納)	ウブヤ	upuja
マーイヤ系(宮国・新里・保良)	マー	ma:ʔiza ma:zza

図 4

5. 祖父 (図4)

「シュー系」(土族語)、「ウヤ系」(池間系)、「ウブイヤ系」(島尻・大浦・大神)、「ウブアイヤ系」(久貝・松原)、「ウブウヤ系」(水納)、「マーイヤ系」(宮国・新里・保良)といった多くの語形がある。「シュー」は、漢語「主(しゅ)」に由来するとされ、沖縄語では平民語であるけれども、宮古語では土族語と認識されているようである。中本(1983:144)では、宮古における祖父の「シュー」を次のように見ている。

宮古では、独自のイヤ系の勢力によって、シュー系は「父」から「祖父」をあらわす語へずれていったものと考えられる。(中本1983:144)

また、池間系方言では、「父」に対してではなく、「祖父」に「ウヤ」と言っている。「ウブ～」は北部地域に集中する。「ウブイヤ」以下の語形は、「父」を意味する語彙(ウヤ系、イヤ系、アイヤ系)に、接頭辞の「ウブ【大】」や「マ【真】」が付いているのであろう。なお、大浦方言は「ウブ」の部分が「ウトウ」となっている。

6. 祖母 (図5)

「ンマ系」(土族語)、「ウブンマ系」(大神・島尻・大浦・多良間・水納)、「パーンマ系」(池間系・宮国・来間)、「アーマ系」(久貝・松原・野原)といったいくつかの語形がある。

土族語では、母が「アンナ」で、祖母が「ンマ」である。平民語では、母が「ンマ」となる。「ウブンマ系」は、平民語の「母」を意味する語彙「ンマ」に、接頭辞の「ウブ【大】」、「パーンマ系」は接頭辞の「パー【母】」、「アーマ系」は接頭辞の「ア【吾】」が付いたものと考えられる。

7. 兄 (図6)

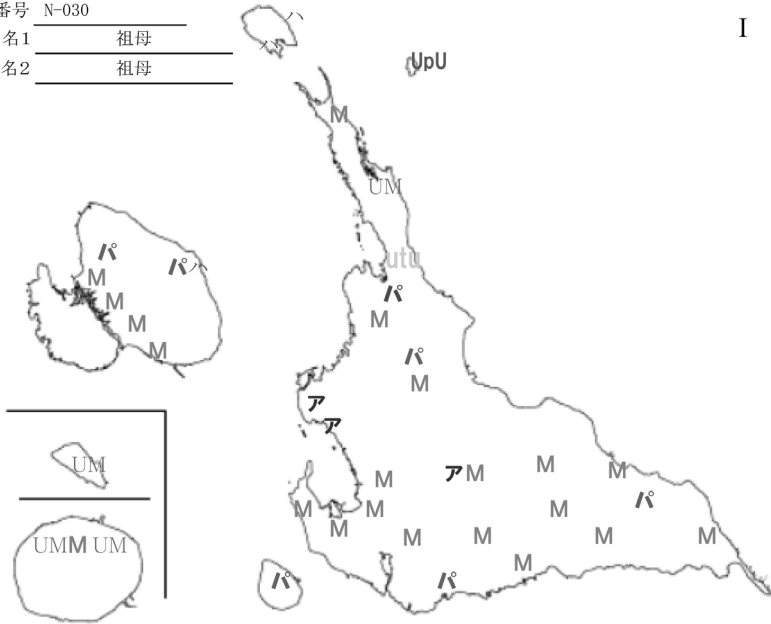
土族語の「アザ系」と平民語の「スザ系」がある。「アザ系」の「ア」は、「あに【兄】」あるいは「あ【吾】」と関係がありそうであるが、語源的に確実なことは分らない。「スザ系」は、池間系や北部地域、久松地域に現れているが、沖縄における「すざ」(オモロ)、「シージャ」(首里方言)と同根である可能性が高そうである。ただし、宮古語の「スザ系」の第1音節は、多くが[su]という*so由来の音であることが問題点として残る。また、第2音節の子音「ザ」が地域によっては「ジャ」(口蓋化)、「ダ」(閉鎖音化)、「タ」(無声化)に音変化している。水納島では、男女関わりなく年上きょうだいを表す名称「イダ」が出ている(「アザ」との2語形併記)。宮国では、「おじ」と同じ語形の「ブザ」が出ている(要再調査)。

項目番号 N-030

項目名1 祖母

項目名2 祖母

I



ンマ系(土族語) M mma mma:

ウブンマ系(大神・島尻・大浦・多良間・水納) UpU UM utu
o:pomma u:ɸma utumma umma

パーンマ系(池間系・宮国・来間) K K ハ pa:amma ha:mma

アーマ系(久貝・松原・野原) A a:ma

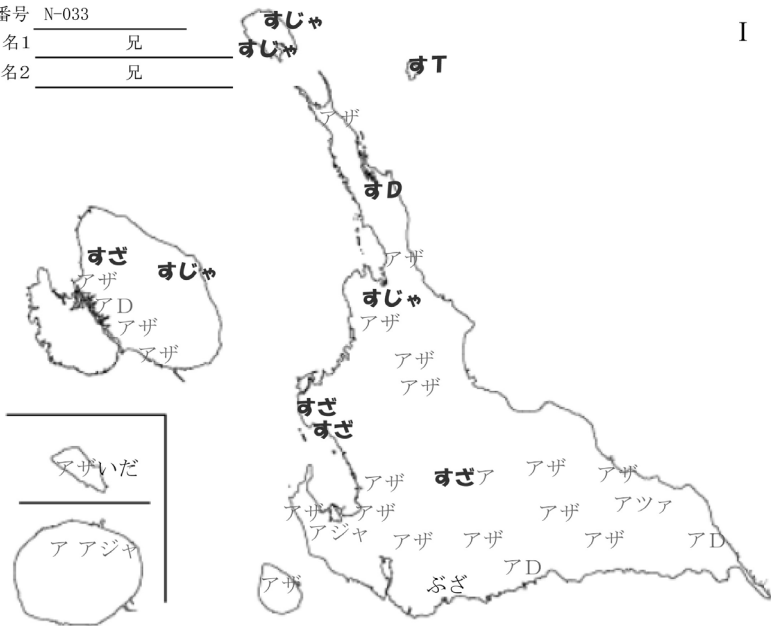
図 5

項目番号 N-033

項目名1 兄

項目名2 兄

I

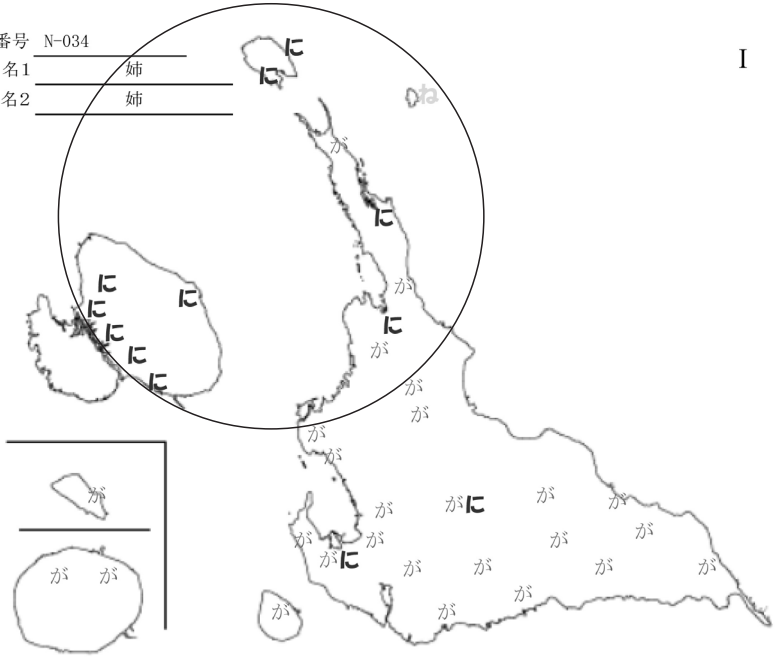


アジャ系(土族語)	アザ	アジャ	アD	アツア	adza a ^ɰ za adʒa ada attsa
スジャ系(平民語)	すざ	すじゃ	すD	すT	sudza sucʒa suda sʉta
イダ(水納)	いだ	ida			
ブザ(宮国)	ぶざ	bu ^ɰ za			

図 6

項目番号 N-034
 項目名1 _____ 姉
 項目名2 _____ 姉

I



アンガ系(土族語)	が	anga	anga:
アニ系(平民語)	に	ani	ani:
	ね	ane	(大神)

図 7

8. 姉 (図7)

土族語の「アンガ系」と平民語の「アニ系」がある。「アンガ系」は沖縄語の「アングワー」(姉)と関係があるのかもしれない。もしそうだと仮定すると、沖縄語の「アングワー」(姉)は平民語であり、ここでも沖縄語の平民語が宮古語の土族語になるという構造が出来上がっている。「アニ系」は、「あね【姉】」に由来すると考えられる。池間系方言が「アニ系」で平民語を用いているのは他の親族語彙と同様であるが、伊良部島全域で(池間系の佐良浜以外でも)「アニ系」になっていることも地域的特徴として指摘できる。

本稿の作成にあたり、平成24年度科研費「琉球宮古方言の言語地理学的研究」(基盤研究(B)、課題番号22320086、代表：西岡敏)の補助を一部受けた。

参考文献

- 沖縄古語大辞典編集委員会 [編] 1995 『沖縄古語大辞典』 角川書店
中本正智 1981 『図説 琉球語辞典』 力富書房金鶏社
中本正智 1983 『琉球語彙史の研究』 三一書房
平山輝男 [編著] 1983 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』 桜楓社
宮城信勇 2003 『石垣方言辞典』 沖縄タイムス社

言語地図にみる宮古語の地域差

Local difference of the Miyako language viewed
from the linguistic atlas

仲原 穰
NAKAHARA Jo

1. はじめに

宮古島とその周辺の島々（池間島、来間島、大神島、伊良部島、多良間島、水納島、下地島）は「宮古諸島」と称する。宮古諸島で伝統的に話されていることばは「宮古方言」、「宮古語」などと名付けられている¹。ただし、宮古諸島のうち下地島は、元々無人島であったため伝統的な言語を有していない。一方、水納島はかつては伝統的な集落があったが現在は集落のほとんどが宮古島高野集落へ移住したため、集落としては存在しない²。特に2009年にユネスコがこの地域のことばを「宮古語」とし、危機に瀕している言語の一つに加えて以来、「宮古語」と称する論考が増えている。他の地域とのコミュニケーションが取れないほどの差異があり、沖縄諸島や八重山諸島との差異が明らかであるため、この「宮古語」という名付けも首肯できる。

しかし、宮古語を用いる集落のすべてが同じことばを話しているのではない。宮古語にも下位区分もあることは、先行研究でも明らかになっている。主なものを紹介すると、仲宗根（1987 [1962]）では「宮古方言」を「宮古本島方言」「伊良部方言」「多良間方言」に三つに下位区分している。また、狩俣（1997 [1992]）では以下のように五つに下位区分している（p.389）。

宮古方言をさらに下位区分すると、1) 宮古本島方言（来間島も含む）、2) 大神島方言、3) 池間島方言、4) 伊良部島方言、5) 多良間島方言（水納島も含む）の5つに分かれる。

さらに、内間（1984）では、「本島北部方言（大浦・島尻・狩俣）と本島南部方言（大浦・島尻・狩俣以外の集落）に分けられる。」と述べ、宮古島内にも下位区分がみられることを指摘している。

本来、「宮古語」の下位区分を正確に示すためには、宮古諸島のすべての集落の音韻・文法・語彙を精密に調査し、比較研究する必要があるが、未調査集落に限定しても、非常

に多くの時間を要する。

そこで本稿では、宮古語の「言語地図」を利用し、宮古語のなかの「地域差」について考えてみたい。この「地域差」は単語ごとに作成した言語地図によって異なっており、それぞれの言語地図に「地域差 = 似た語形を用いる地域群」がみられる。このような「地域差」を重ねると、方言間の「親近性」もみえてくるだろう。よって今回は、宮古語の言語地図のなかから、主に地域差が顕著にみられるものを提示し、論じてみたい。

今回使用する宮古語の言語地図の言語資料は、「沖縄言語研究センター」が1979年から実施した「琉球列島言語の研究」の「調査票」（第1～第4）と「全集落調査票」を用いた調査データが主であるが、未調査の語彙や当該地域の語形ではないと判断される集落については、補足調査によって得られた言語資料で補った。

本稿で用いる「言語地図」はデータベース・ソフト「FileMaker Pro 9」を用いて作成した³。地図に記された「記号」は、各集落で用いられる語形の一部分を表象し、記号化したものである。実際に作成した「言語地図」では、「記号」を色分けし、似た特徴を持つ語形を寒色や暖色、ひらがなやカタカナ、アルファベットなどによってグルーピングしている。本稿ではモノクロでも語形の違いがわかるように「記号」の書体や文字の種類を変えて示し、具体的な語形は地図下方部の「凡例」に示した。ただし、言語地図によっては、未調査のままの集落や調査ミスとみられるものもあった。その場合は地図に「記号」を示さず、空白とした⁴。

なお、本研究は平成22年度科学研究費基盤研究（B）「琉球宮古方言の言語地理学的研究」（課題番号22320086、代表者西岡敏）の成果の一部を利用したものである。

2. 母音の特徴

2-1 中舌母音 /i/ の分布

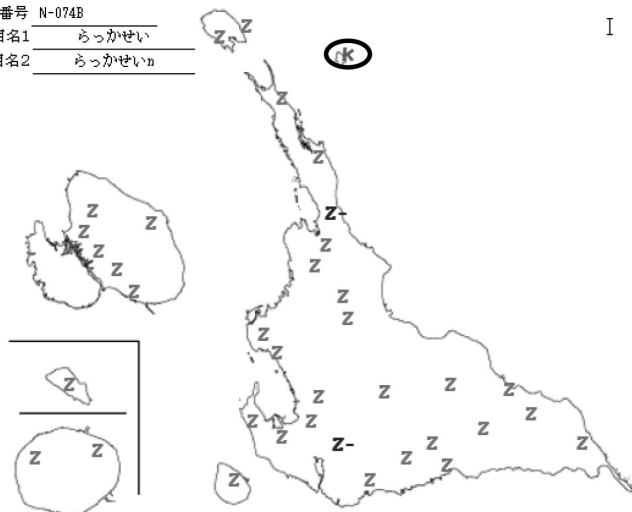
中舌母音⁵を有するのは宮古語の特徴である。宮古諸島では図1 [らっかせい]⁶に示すように、すべての地域に中舌母音 /i/ が認められる⁷。

項目番号 N-074B

項目名1 らっかせい

項目名2 らっかせい

I



(1)第1音節が/z/

Z dzimami ^(a)zimami dzima「mi」:

Z- dzimami ^(a)zima「mi

(2)第1音節が/k/

K kimami

図1 らっかせい

2-2 /i/を失いつつある方言

ただし、池間系方言（池間、前里、佐良浜、西原）や水納島方言などでは、中舌母音ではなく、前舌母音 /i/ に対応する場合もある（図2【鳥】）。なお、日本語（標準語）の「り」が、/ri/や/ri/でなく成節的な子音 /L/へと変化した地域もみられる（伊良部方言・多良間方言）。

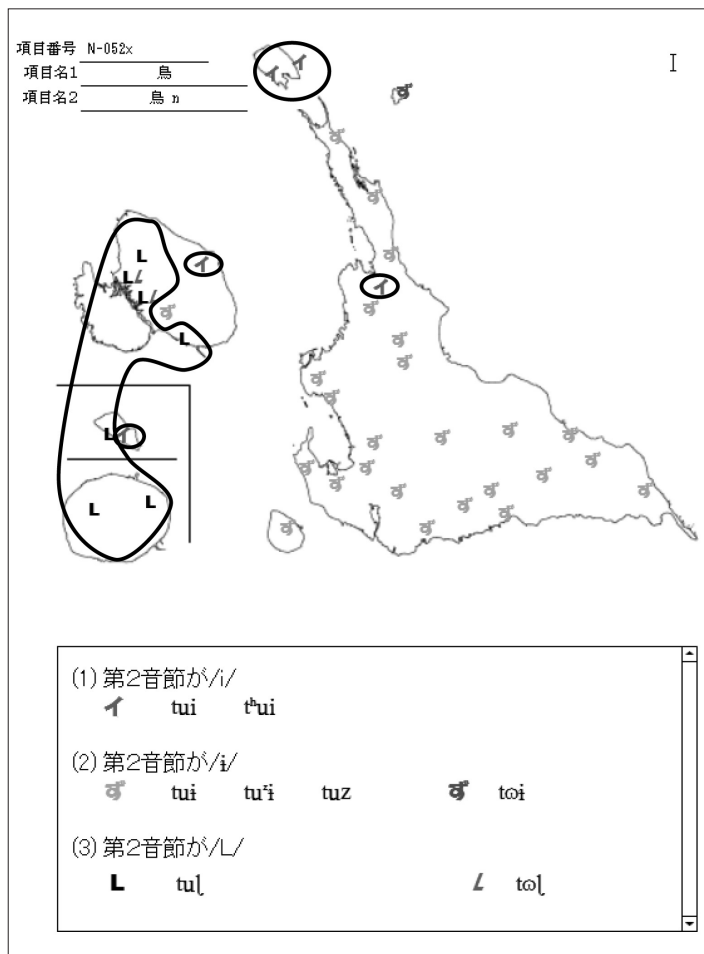


図2 鳥

この /L/ は分布が異なる地図もある (図3 [針])。このことは単語ごとに伝播状況が異なるものもあることを表している⁸⁾。

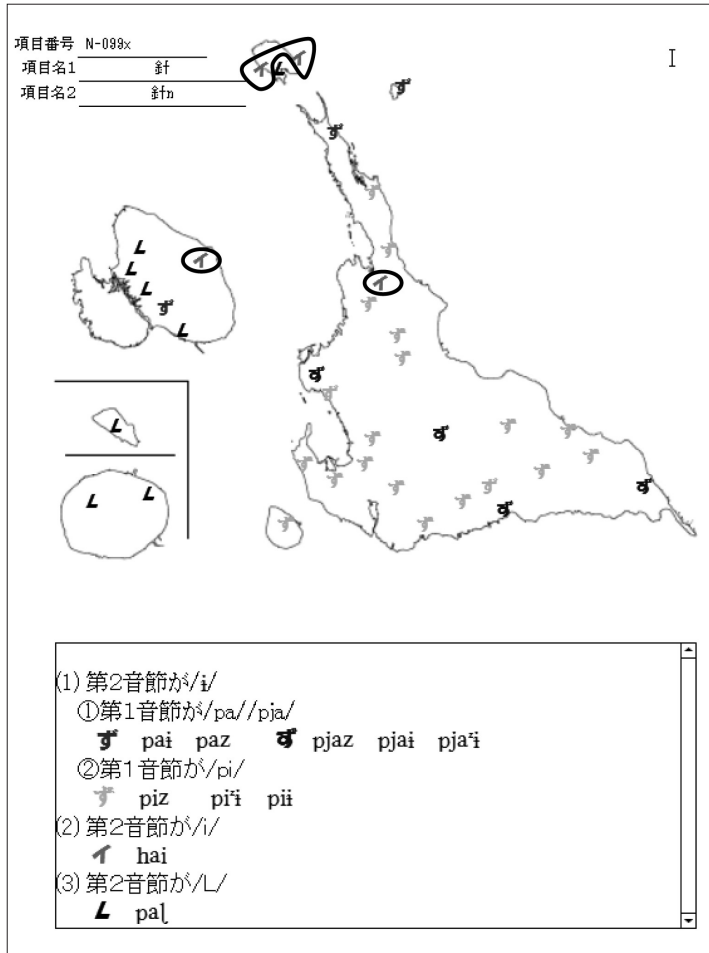


図3 針

2-3 連母音の融合の有無

図4【どう、どうして】に示したように、宮古諸方言のうち、いくつかの方言で母音が融合せずに連母音を保つ方言がみられる。この連母音の融合も /L/ の対応と同様に、単語ごとに異なる分布をみせる(図5【だれ】)。特に宮古島北部(池間島、伊良部島など)と南部の一部(新里や新城など)では連母音が融合しづらいのがわかる。

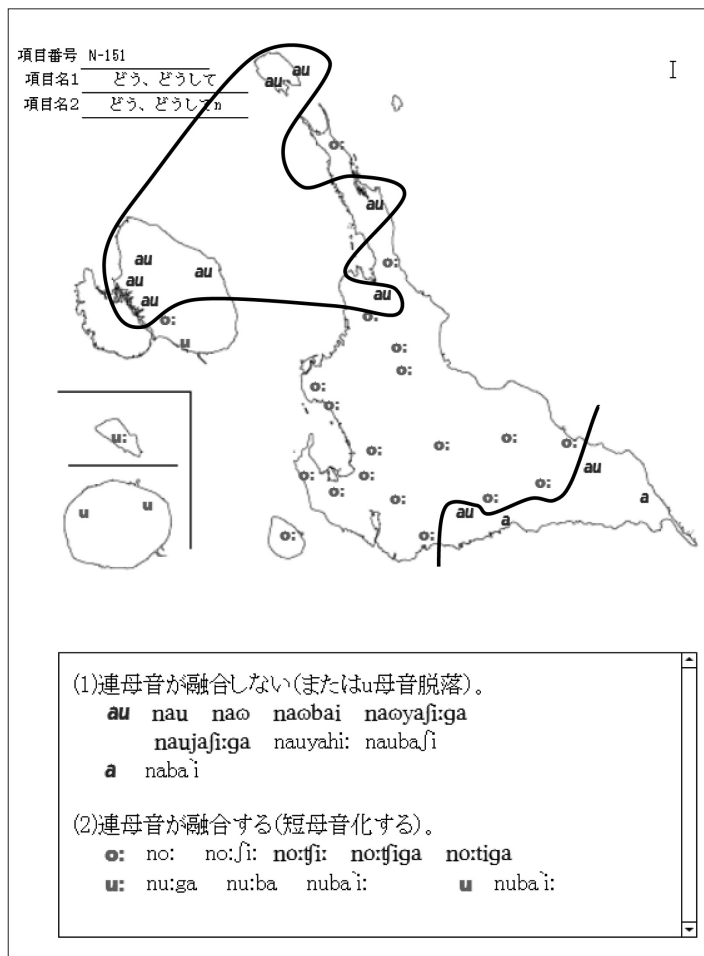


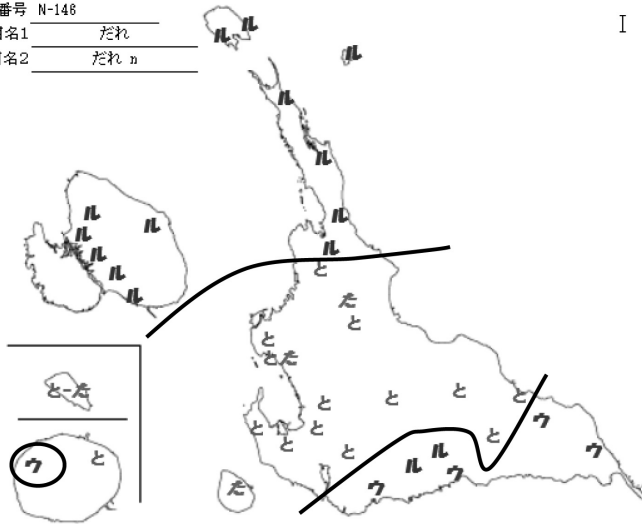
図4 どう、どうして

項目番号 N-148

項目名1 だれ

項目名2 だれ n

I



(1) 連母音がくっつかない

ル taru

ウ tau

(2) 連母音がくっつく

と to: **と-** tore:

た ta: (北琉球と同じ語形)

図5 だれ

3. 子音の特徴

3-1 /p/音の有無

宮古諸方言の多くの方言で日本語の「は行音」にはp音が対応するが、池間系の諸方言ではh音化している(図6【鼻】)。しかし、図7【歯】では池間島の字池間や宮古島西原にP音の語形がみられる。これについて平山(1964)は、本来はP音であり、世代差による変化によってh音になったと論じている⁹⁾。

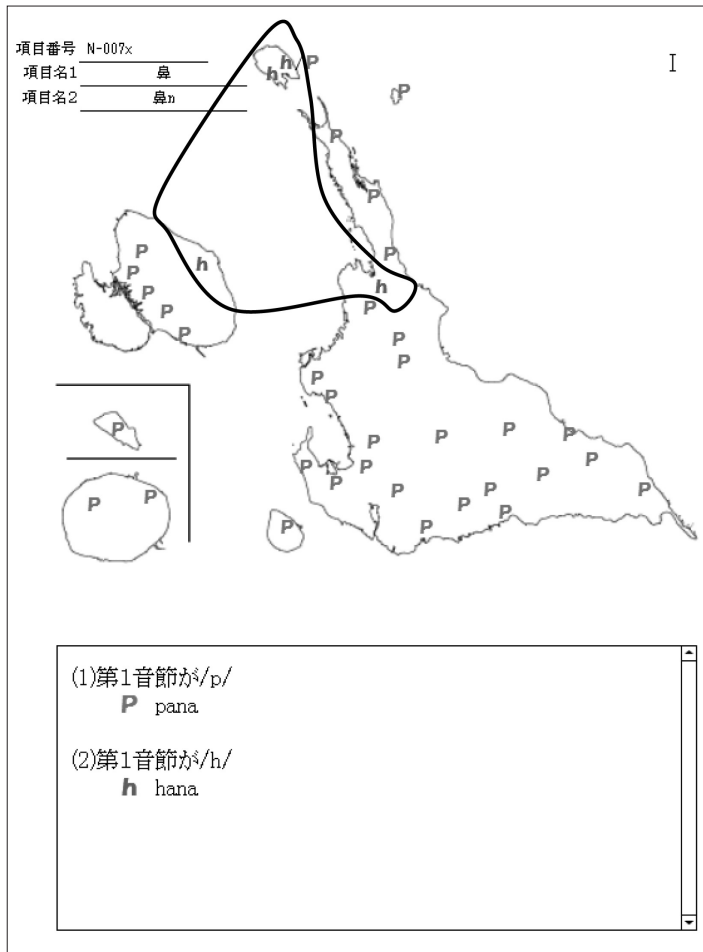


図6 鼻

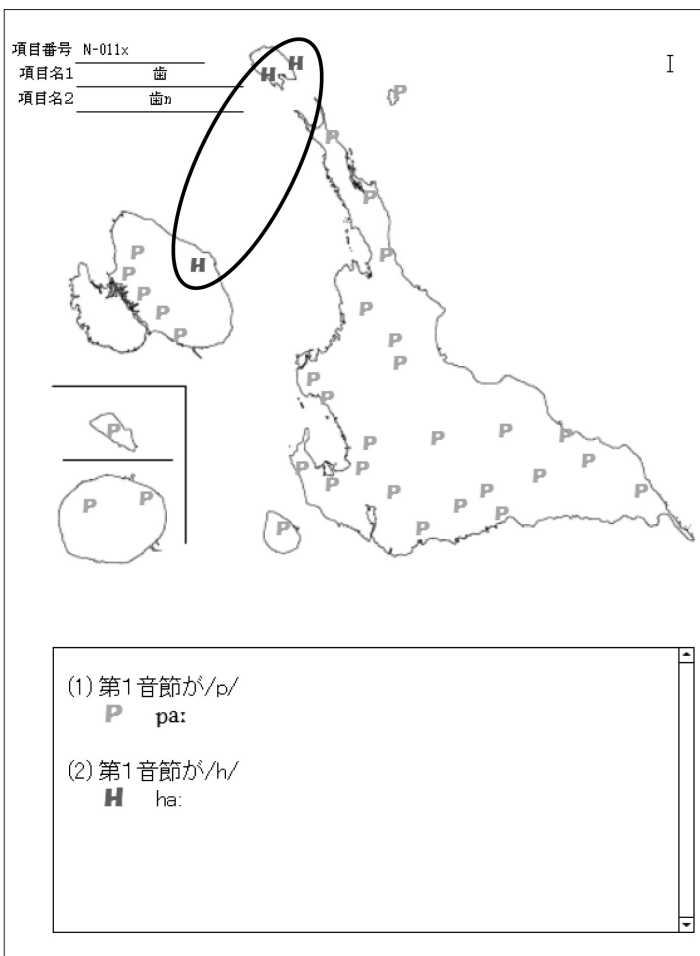


図7 齒

3-2 破擦音化 (硬口蓋化)

破裂音 /k/ /g/ の破擦音化

ここでは特に破裂音が破擦音化 (/c/ /z/) する現象を取りあげる (図8 [肝]、図9 [さとうきび])。この変化を起こすのは、池間系の諸方言の他、伊良部方言や宮古島南部方言の一部 (友利、保良、福里、来間島) などである。

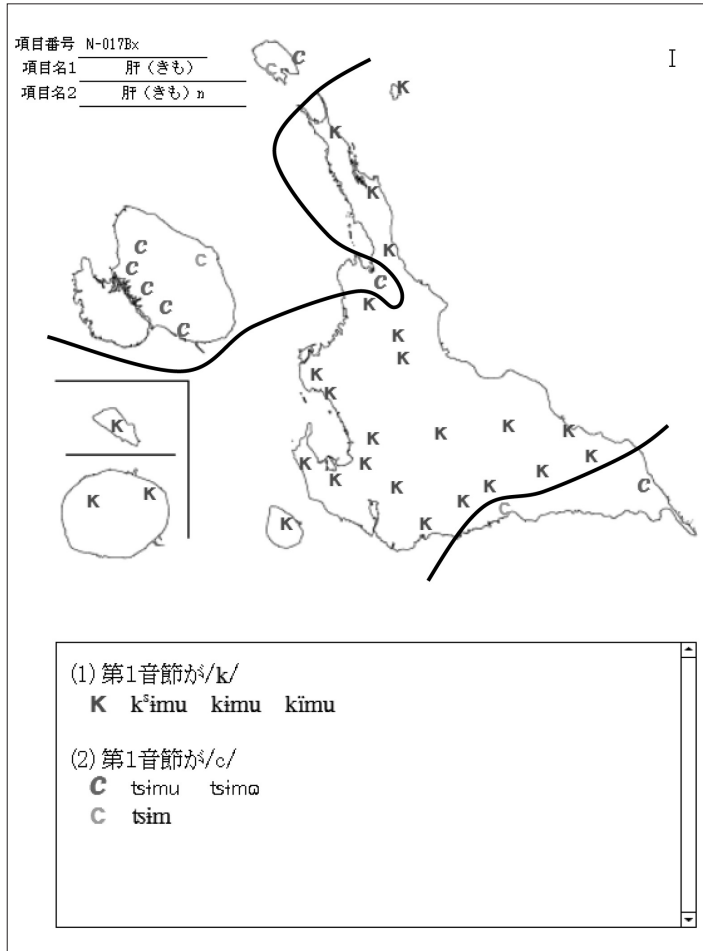


図8 肝

項目番号 N-071x I

項目名1 さとうきび

項目名2 さとうきびn

(1)最終拍が^s/g/または/k/
 G bu:gi K pa:ki

(2)最終拍が^s/z/
 z bu:ɬi bə:ɬi bu:z

(3)第1拍が^s/s/
 s sidɬa fidɬa

図9 さとうきび

破裂音 /t/ の破擦音化

破裂音 /t/ が破擦音 /c/ になる現象がみられる方言群がある (図10 [天]、図11 [手])。宮古島では北部の島尻、南部の保良、友利、宮国であり、伊良部島の国仲でもこの現象がおきている。

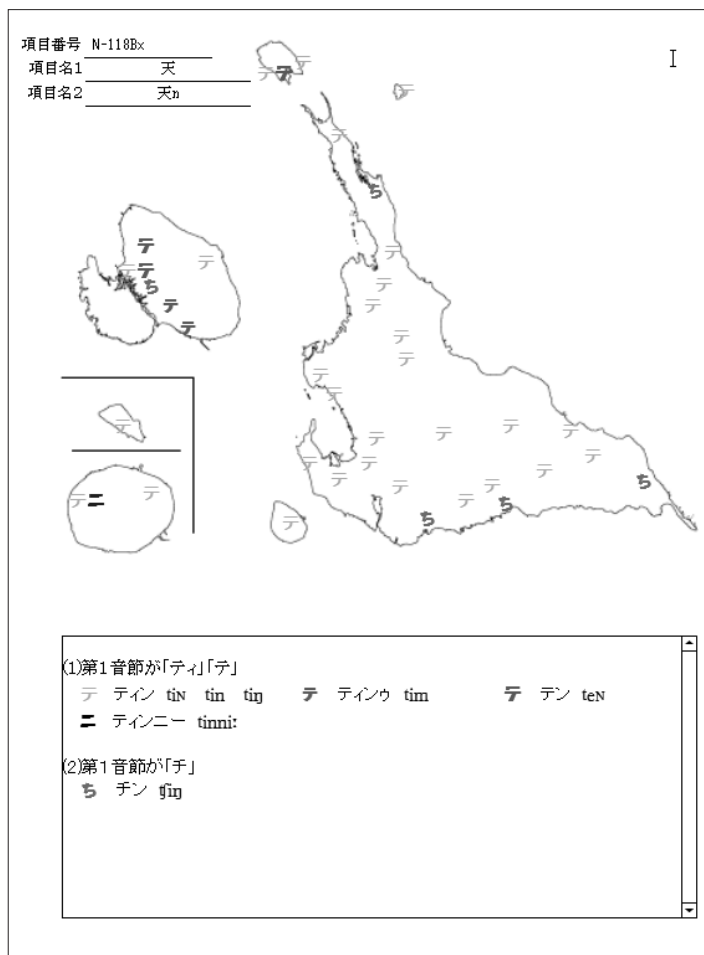


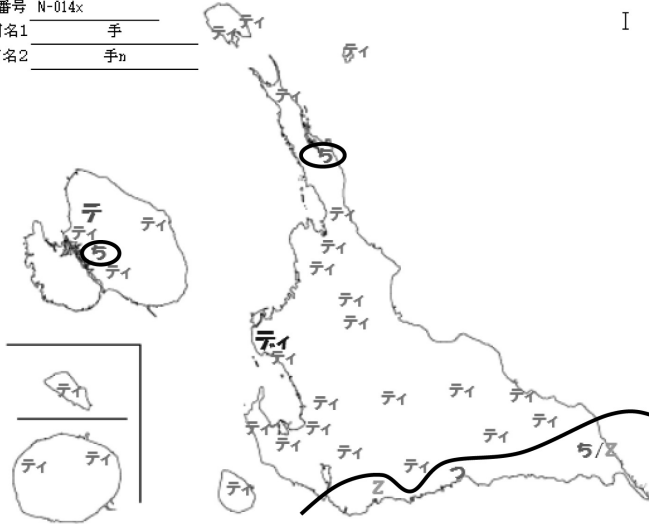
図10 天

項目番号 N-014x

項目名1 手

項目名2 手_n

I



1. 「て」由来	
(1) 第1音節が /t/	(2) 第1音節が /c/
テ ti: テ te:	ち tʃi: つ tsi:
2. 「うで」由来	
(1) 第2音節が /d/	(2) 第2音節が /z/
テ ^u di u ^u di	Z u ^u dʒi

図11 手

3-3 成節的子音 /M/ の有無

宮古方言では唇を閉じる「ン」 /m/ と閉じない「ン」 /n/ とで意味を区別する地域がある。図12【土】の m で示した地点（主に宮古島北部、池間島宇池間を除く全地域）は、成節的子音 /M/ を有する可能性がある地域である。通常の撥音は後続する子音と同じ調音点になるが、M で示した地域では後続子音が歯茎音 /t/ であっても両唇音 /m/ の「ン」になる。当該地域でミニマル・ペアが確認されれば音素 /M/ が認定できる。

ちなみに、この成節的子音 /M/ がみられる地域（図12【土】）と日本語（標準語）「に」が撥音化する地域（図13【荷】）は重なっていない。

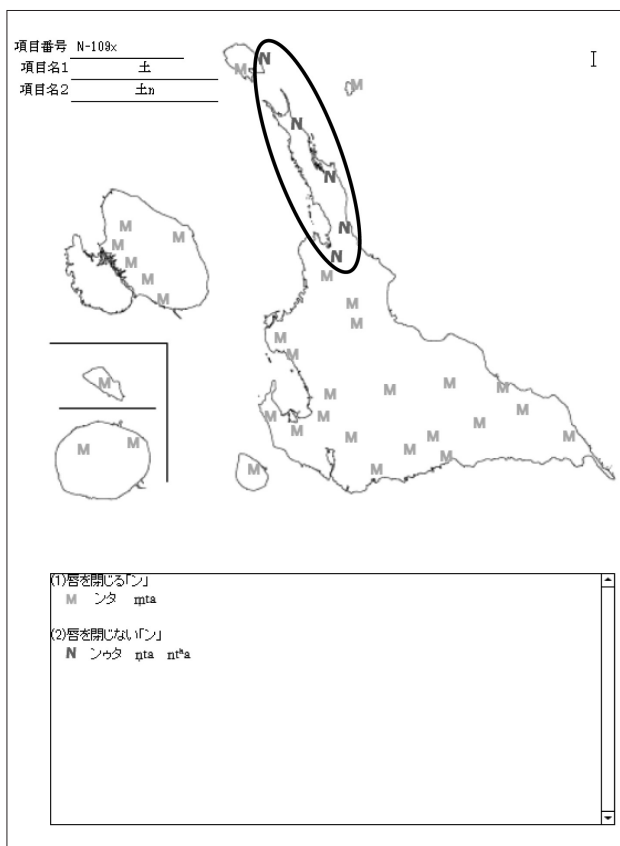


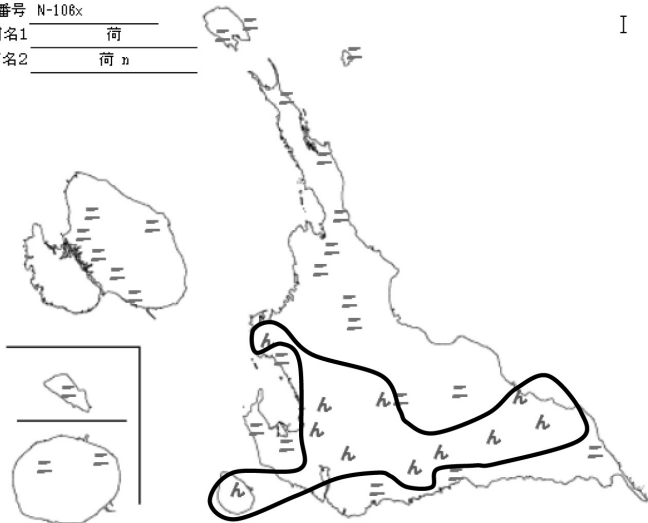
図12 土

項目番号 N-106x

項目名1 荷

項目名2 荷 n

I



(1) 第1音節が「ニ」

ニ ニー ni nimusi

(2) 第1音節が「ん」

ん ー n: n:

図13 荷

4. その他の諸現象

最後に、上記以外にみられる子音変化による地域差の言語地図を紹介したい（図14【風】、図15【節】、図16【毛】、図17【竿】）。

14【風】は破擦音の破裂音化であり、池間系諸方言と多良間諸方言にみられる現象である。

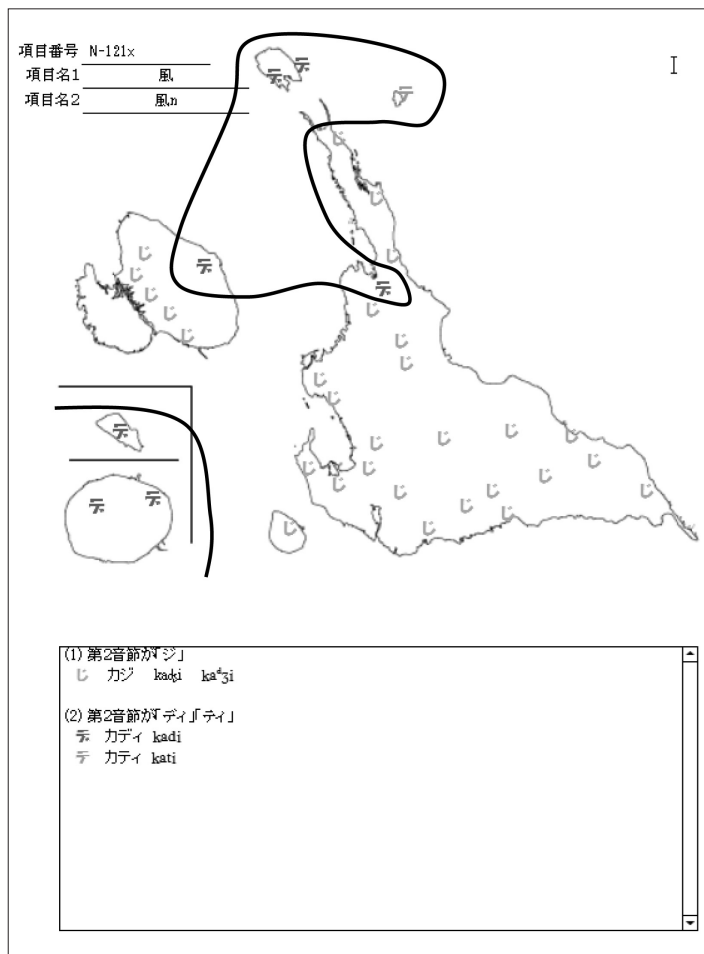


図14 風

つぎに示す図15【節】は摩擦音の弱化と破裂音化（/k/ /g/）を示している。子音が弱化するのは宮古島中南部方言の一部と伊良部方言の一部であり、破裂音化しているのは宮古島北部および多良間島、水納島方言、伊良部島方言の一部である。

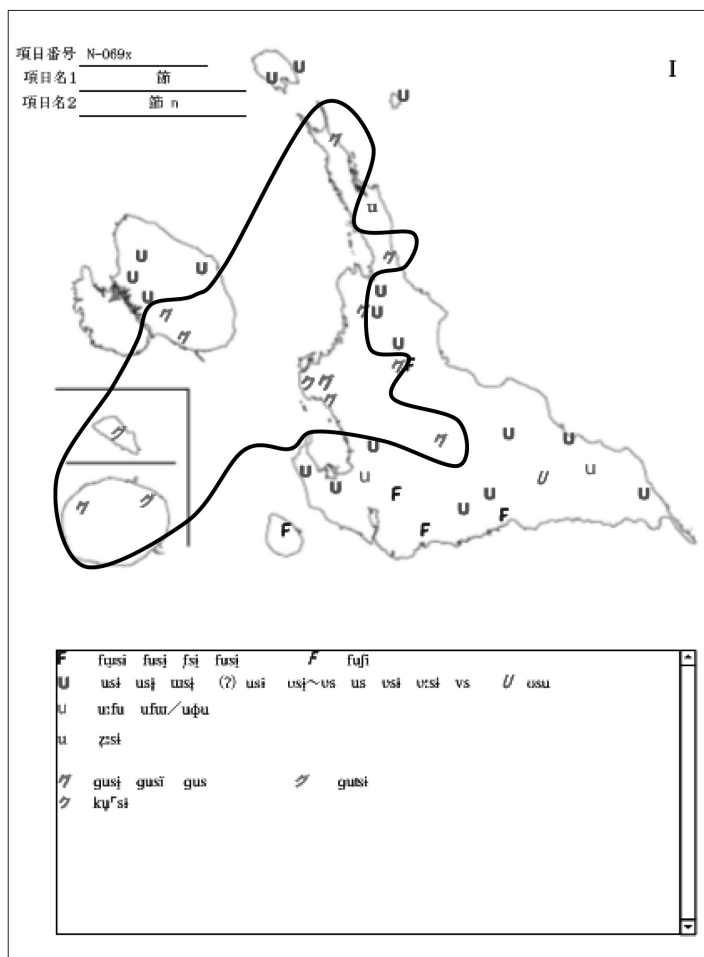


図15 節

図16【毛】は語頭の有声音化を示しており、破裂音 /p-/ が有声音 /b/ になる地域は宮古島北部の狩俣、島尻、大浦である。この地域が成節的子音の有無でも他と異なる特徴を持つことは、すでに図12【土】で述べたとおりである。

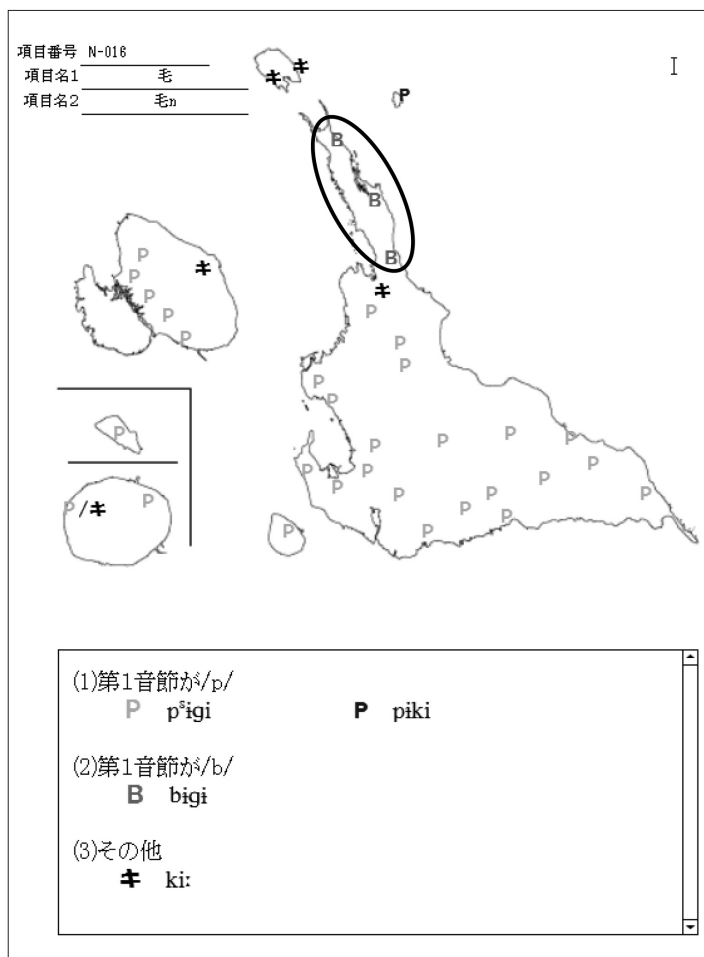


図16 毛

つぎの図17〔竿〕は、直音の拗音化の例である。拗音化するのは多良間島の塩川、仲筋、水納島の水納である。この地域は図9〔さとうきび〕でも別系統の [sidʝa]（塩川、仲筋、水納）や [fidʝa]（水納）を用いる地域である。

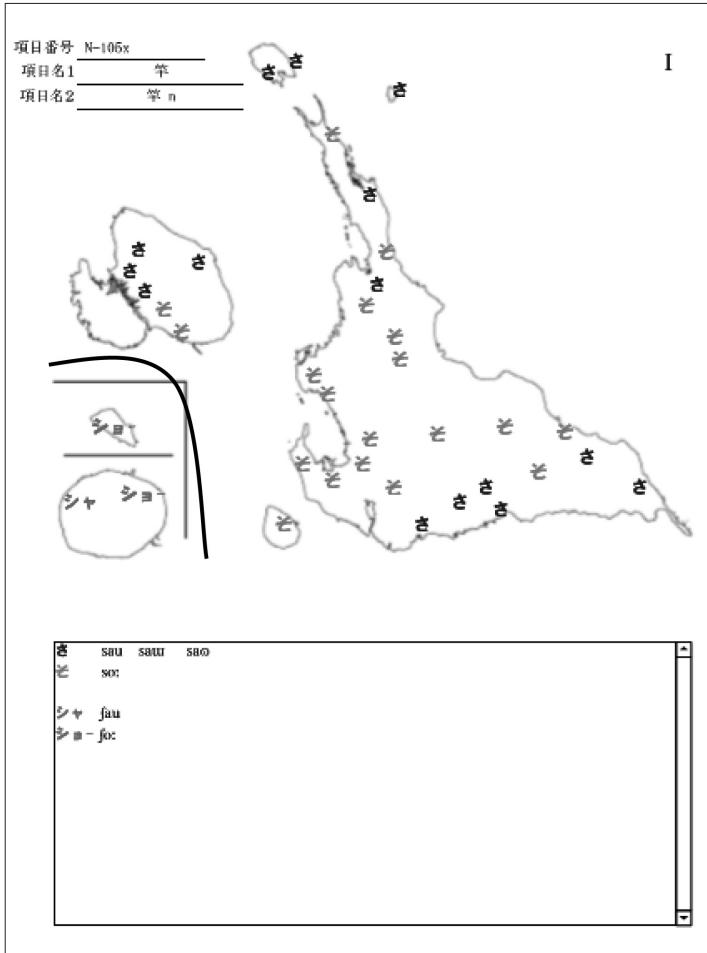


図17 竿

5. 宮古語の地域差

ここまで、宮古語の言語地図を手掛かりに地域差をみてきた。

具体的に述べると、図1【らっかせい】では中舌母音の分布、図2【鳥】と図3【針】では中舌母音の有無と /L/ に変化する地域、図4【どう、どうして】と図5【だれ】では連母音の融合しない地域、図6【鼻】と図7【歯】では /h/ 音化する地域、図8【肝】と図9【さとうきび】では破擦音化 /k/ /g/ /c/ /z/ する地域、図10【天】と図11【手】では破擦音化 /t/ /c/ する地域、図12【土】では成節の子音 /M/ にならない地域、図13【荷】では「に」の撥音化がみられる地域、図14【風】では破擦音の破裂音化がみられる地域、図15【節】では摩擦音の弱화가みられる地域、図16【毛】では語頭の有声音化がみられる地域、図17【竿】では直音が拗音化する地域である。

その結果、それぞれの言語地図から以下のような「地域的なまとまり」があることが確認された。

表1 宮古語の言語地図にみられる「地域的なまとまり」

番号	地域的なまとまり (集落名)
1	/i/ 宮古語全域に分布。/k/ 大神
2	/i/ 池間、前里、佐良浜、西原 /L/ 佐和田、長浜、国仲、伊良部；水納、塩川、仲筋、(前里)
3	/i/ 池間、前里、佐良浜、西原 /L/ 佐和田、長浜、国仲、伊良部；水納、塩川、仲筋、(前里)
4	/au/ 池間、前里、佐良浜、西原、島尻、佐和田、長浜、国仲、新城、新里 /a/ 友利、保良
5	/taru/ 池間、前里、佐良浜、西原、島尻、大浦、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部、砂川、友利、新城、保良、新里 /tau/ 宮国、仲筋
6	/h/ 池間、下里、佐良浜、西原
7	/h/ 池間、前里、佐良浜
8	/cimu/ 池間、西原、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部 /ciM/ 前里、佐良浜、友利
9	/buRz (i) / 池間、前里、佐良浜、西原、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部、来間、友利、福里、保良 /siQzja/ 塩川、仲筋、水納
10	/c-/ 島尻、国仲、友利、保良、宮国
11	/-c-/ 島尻、国仲、友利、保良 /-z-/ 宮国
12	/N/ 池間、西原、狩俣、島尻、大浦
13	/N/ 久貝、砂川、福里、比嘉、新城、川満、洲鎌、嘉手苺、新里、来間
14	/-d-/ 池間、前里、佐良浜、西原、塩川、仲筋、水納 /-t-/ 大神
15	/g-/ 仲地、伊良部、狩俣、大浦、荷川取、東仲宗根、久貝、松原、野原、塩川、仲筋、水納 /k-/ 久貝
16	/b-/ 狩俣、島尻、大浦
17	/sj-/ 塩川、仲筋、水納

表 1 により、宮古語のなかで似た特徴を持つ地域は、以下の 6 種類になると考えられる。

- (1)宮古島北部方言、南部方言（来間方言を含む）
- (2)宮古島中央部方言
- (3)池間系諸方言（池間、前里、佐良浜、西原）
- (4)伊良部方言（佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部）
- (5)多良間系方言（塩川、仲筋、水納方言）
- (6)大神方言

これらのうち、(1)の宮古島北部方言は狩俣、島尻、大浦方言であり、南部方言は旧城辺の保良や友利、旧上野の新里やその周辺の集落である。ただし、南部地域では語形が一致しない言語地図もいくつかみられるため、等語線をどこに引いてよいのかまだ判断できない。また、(1)と(2)と、(3)以下との区分にレベルの差がある可能性もある。よって、これらは宮古語の地域差を示すグルーピングではあるが、下位区分を示すものではないことを断っておく。

6. 結び

宮古語の地域差について、17枚の言語地図にみられる地域的なまとまりを手掛かりに分類を試みた。その結果、(1)宮古島北部・南部方言、(1)宮古島中央部方言、(3)池間系諸方言、(4)伊良部方言、(5)多良間系方言、(6)大神方言という六つの地域差を示すことができた。しかし、宮古語の下位区分までは示すことができなかった。より正確な下位区分を示すためには、より多くの言語地図に地域的なまとまりを示す等語線を引き、その束の数の数量に応じて精緻な言語区分を行う必要がある。今回は音声的な特徴を中心としたわずかな言語地図をもとに分類をおこなったが、今後は動詞や形容詞などの言語地図にみられる地域差も併せて考えてみたい。

注

¹ たとえば中本（1976）では「宮古方言」と称し、「この方言は多良間島・水納島・来間島・伊良部島・池間島・大神島・宮古島に分布する」（p.80）と述べている。また、かりまた（2012）では「宮古諸語方言（以下宮古語）」（p.70）や「宮古諸語」（p.71）などと称している。

² 水納方言の詳しい報告はほとんどみられないが、下地（2012）などにより、明らかにされつつある。

³ 地図の基本的な設計は仲間恵子氏によるものである。筆者は各集落の方言語形を分析し、似た語形に類似の「記号」を割り当てるなどして、地図化を行った。

⁴ 本稿の言語地図で「記号」がプロットされている地点（集落）を末尾に資料として示す。言語地図をみる際に参照されたい。

⁵ 中舌母音について、これまで中舌母音のほか、舌尖母音とみる考えや、二つの母音の同時調音とみる考え、子音とみる考えなども示されている。筆者は、母音の音色が観察されること、舌端と前舌面を平面にするつもりで [e] の位置よりもやや上に持ち上げて調音されることにより、「中舌母音」とみなす。詳しくは稿を改めて論じるつもりである。

⁶ 以下、言語地図を墨付き括弧 [] でくくって示す。また、[] の前に地図番号を入れる。

⁷ この地図では大神方言だけ異なる記号を示している。これは語頭子音が有声の [d̥] ではなく、無声の [k] へと変化したためであり、母音の違いではない。宮古語全体に中舌母音/i/が認められる。

⁸ 言語地図03〔針〕は「道具」であるため、道具とともに方言語形も伝達された可能性もある。

⁹ 平山（1964）には「池間方言では68才の翁長春福氏の発音（「老」と呼ぶ）によれば、他の宮古の諸方言と同じく、（花）[pana]、（昼）[pɪ:ma]のように pa 行が体系的に存し、48才の勝連雅夫氏他数氏の発音（「若」と呼ぶ）には、この種の pa 行はなく、すべて（花）[hana]、（昼）[çi:ma]のようになっている」と述べられている。

参考文献

- 内間直仁 1984 「宮古諸島の方言」『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』国書刊行会 pp.251-287
- 狩俣繁久 1997 [1992] 「宮古方言」『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』三省堂 pp.388-403
- かりまたしげひさ 2012 「宮古語の動詞活用 - 代表形、否定形、過去形、中止形 - 」木部暢子編 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 pp.69-107
- 仲宗根政善 1987 [1962] 「琉球方言概説」『琉球方言の研究』新泉社
- 中本正智 1976 『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- 下地賀代子 2012 「南琉球多良間水納島方言の名詞の格形式」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第17巻第1号（通巻第30号） pp.61-83

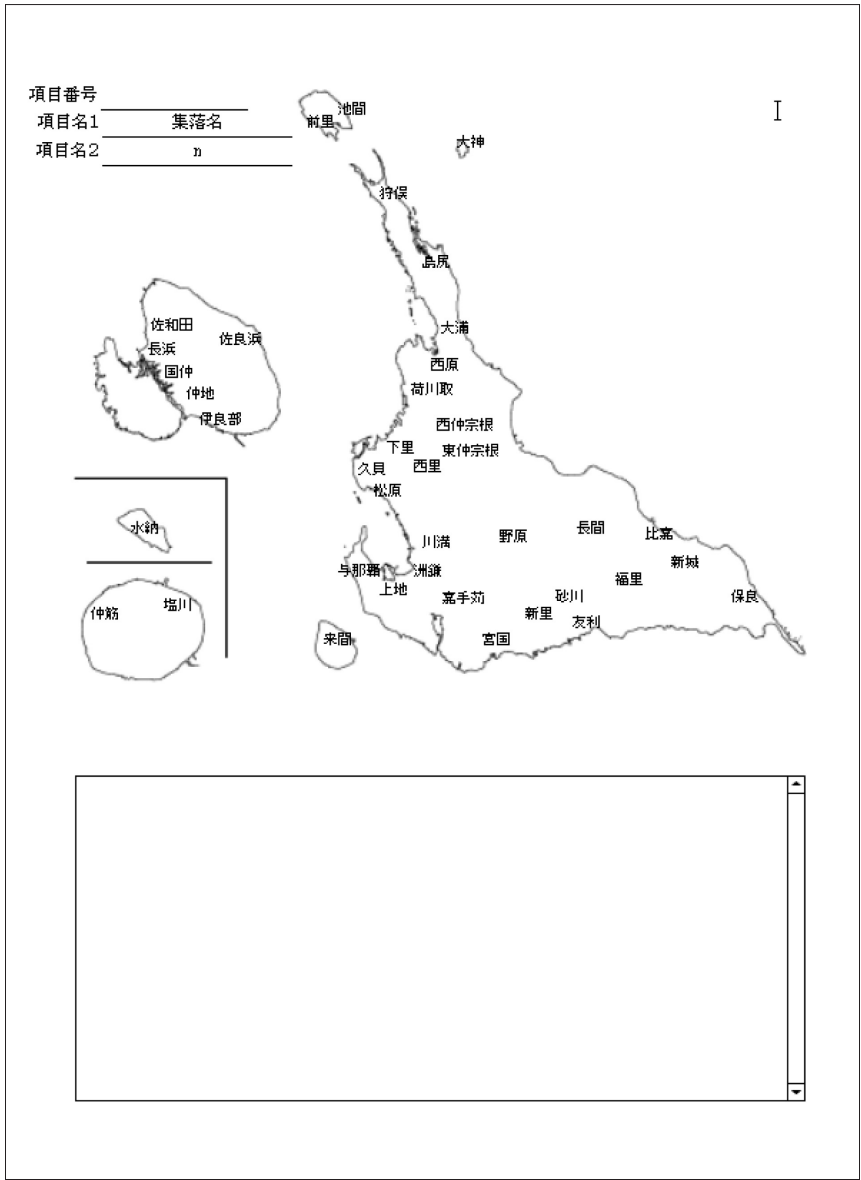


図18